

蒲団

田山花袋



小石川の切支丹坂きりしたんざかから極楽水ごくらくすいに出る道のだらだら坂を下りようとして渠かれは考えた。「これで自分と彼女との関係は一段落を告げた。三十六にもなつて、子供も三人あつて、あんなことを考えたかと思うと、馬鹿々々しくなる。けれど……けれど……本当にこれが事実だろうか。あれだけの愛情を自身に注いだのは単に愛情としてのみで、恋ではなかつたらうか」

数多い感情ずくめの手紙——二人の関係はどうしても尋常ではなかつた。妻があり、子があり、世間があり、師弟の關係があればこそ敢てあえ烈はげしい恋に落ちなかつたが、語り合あう胸むねの轟とどろき、相見る眼の光、その底には確かに凄すさまじい暴風あらしが潜ひそんでいたのである。機会でつくわに遭遇あひさえすれば、その底の底の暴風たちまは忽たちまち勢いきほを

得て、妻子も世間も道徳も師弟の関係も一挙にして破れて了しまうであろうと思われた。少くとも男はそう信じていた。それであるのに、二三日来のこの出来事、これから考えると、女は確かにその感情を偽り売ったのだ。自分を欺いたのだと男は幾度も思った。けれど文学者だけに、この男は自ら自分の心理を客観するだけの余裕を有もっていた。年若い女の心理は容易に判断し得られるものではない、かの温あたたかい嬉うれしい愛情は、単に女性特有の自然の発展で、美しく見えた眼の表情も、やさしく感じられた態度も都すべて無意識で、無意味で、自然の花が見る人に一種の慰藉なぐさみを与えたようなものかも知れない。一步を譲って女は自分を愛して恋していたとしても、自分は師、かの女は門弟、自分は妻あり子ある身、かの女は妙齡の美しい花、そこに互に意識の加わるのを如何いかにともすることは出来まい。いや、更に一步を

進めて、あの熱烈なる一封の手紙、陰に陽にその胸の悶を訴えて、丁度自然の力がこの身を圧迫するかのようになり、最後の情を伝えて来た時、その謎をこの身が解いて遣らなかつた。女性の一つつましやかな性として、その上に猶露わに迫つて来る事がどうして出来よう。そういう心理からかの女は失望して、今回のような事を起したのかも知れぬ。

「とにかく時機は過ぎ去つた。かの女は既に他人の所有だ！」  
歩きながら渠はこう絶叫して頭髪をむしつた。

縞セルの背広に、麦稈帽、藤蔓の杖をついて、やや前のめりにだらだらと坂を下りて行く。時は九月の中旬、残暑はまだ堪え難く暑いが、空には既に清涼の秋気が充ち渡つて、深い碧の色が際立つて人の感情を動かした。肴屋、酒屋、雑貨店、その向うに寺の門やら裏店の長屋やらが連つて、久堅町の低い地に

は数多あまたの工場の煙筒えんとつが黒い煙を漲みなぎらしていた。

その数多い工場の一つ、西洋風の二階の一室、それが渠みづの毎日正午ひるから通う処で、十畳敷ほどの広さの室へやで中央まんなかには、大きい一脚テーブルの卓が据えてあつて、傍に高い西洋風の本箱、この中には総すべて種々の地理書が一杯入れられてある。渠はある書籍会社の囑託を受けて地理書の編輯へんしゅうの手伝に従つていたのである。文  
学者に地理書の編輯！ 渠は自分が地理の趣味を有つてい  
らと称して進んでこれに従事しているが、内心これに甘あまんじてお  
らぬことは言うまでもない。後おくれ勝なる文学上の閱歴、断篇の  
みを作つて未いまだに全力の試みをする機会に遭遇せぬ煩悶はんもん、青年  
雑誌から月毎に受ける罵評ばひょうの苦痛、渠かれ自らはその他日成すある  
べきを意識してはいるものの、中心これを苦に病まぬ訳には行  
かなかつた。社会は日増ひましに進歩する。電車は東京市の交通を一

変させた。女学生は勢力になつて、もう自分が恋をした頃のよ  
うな旧式の娘は見たくも見られなくなつた。青年はまた青年で、  
恋を説くにも、文学を談ずるにも、政治を語るにも、その態度  
が総て一変して、自分等とは永久に相触れることが出来ないよ  
うに感じられた。

で、毎日機械のように同じ道を通つて、同じ大きい門を入つ  
て、輪転機関の屋いえを撼うごかす音と職工の臭い汗との交つた細い間を  
通つて、事務室の人々に軽く挨拶あいさつして、こつこつと長い狭い階梯はしご  
を登つて、さてその室へやに入るのだが、東と南に明いたこの室は、  
午後の烈しい日影を受けて、実に堪え難く暑い。それに小僧が  
無精そうじで掃除そうじをせぬので、卓の上には白い埃ほこりがざらざらと心地悪  
い。渠は椅子に腰を掛けて、煙草たばこを一服吸つて、立上つて、厚  
い統計書と地図と案内記と地理書とを本箱から出して、さて静

かに昨日の続きの筆を執り始めた。けれど二三日来、あたま頭脳がむしやくしゃしているので、筆が容易に進まない。一行書いては筆を留めてその事を思う。また一行書く、また留める、又書いてはまた留めるといふ風。そしてその間に頭脳に浮んで来る考は総て断片的で、猛烈で、急激で、絶望的の分子が多い。ふとどういふ聯想れんそうか、ハウプトマンの「寂さびしき人々」を思い出した。こうならぬ前に、この戯曲をかの女の日課として教えて遣ろうかと思つたことがあつた。ヨハンネス・フォケラートの心事と悲哀とを教えて遣りたかつた。この戯曲を渠が読んだのは今から三年以前、まだかの女のこの世にあることをも夢にも知らなかつた頃であつたが、その頃から渠は淋さびしい人であつた。敢てヨハンネスにその身を比そうとは為しなかつたが、アンナのような女がもしあつたなら、トラジディそういう悲劇に陥るのは当然だとしみ

じみ同情した。今はそのヨハンネスにさえなれぬ身だと思つて長嘆した。

さすがに「寂しき人々」をかの女に教えなかつたが、ツルゲネーフの「ファースト」という短篇を教えたことがあつた。洋燈ランプの光明あきりかなる四畳半の書齋、かの女の若々しい心は色彩ある恋物語に憧れ渡つて、表情ある眼は更に深い深い意味を以て輝きわたつた。ハイカラな庇髪ひさがみ、櫛くし、リボン、洋燈の光線がその半身を照して、一卷の書籍に顔を近く寄せると、言うに言われぬ香水のかおり、肉のかおり、女のかおり——書中の主人公が昔の恋人に「ファースト」を読んで聞かせる段を講釈する時には男の声も烈しく戦ふるえた。

「けれど、もう駄目だ！」

と、渠は再び頭髪かみをむしつた。

渠かれは名を竹中時雄と謂いつた。

今より三年前、三人目の子が細君の腹に出来て、新婚の快樂などはとうに覚さめ尽した頃であつた。世の中の忙しい事業も意味がなく、一ライフワーク生作に力を尽す勇氣もなく、日常の生活——朝起きて、出勤して、午後四時に帰つて来て、同じように細君の顔を見て、飯を食つて眠るといふ單調なる生活につくづく倦あき果つて了しまつた。家を引越歩いても面白くない、友人と語り合つても面白くない、外国小説を読み涉あ獵さつても満足が出来ぬ。いや、庭樹にわぎの繁しげり、雨の点滴てんてき、花の開落などいふ自然の状態さえ、平凡なる生活をして更に平凡ならしめるような氣がして、身を置

くに処は無いほど淋しかった。道を歩いて常に見る若い美しい女、出来るならば新しい恋を為たいと痛切に思った。

三十四五、実際この頃には誰にでもある煩悶はんもんで、この年頃に賤いやしい女に戯るるものが多いのも、畢竟ひつきょうその淋しさを医いやす為めである。世間に妻を離縁するものもこの年頃に多い。

出勤する途上に、毎朝邂逅であう美しい女教師があつた。渠はその頃この女に逢あうのをその日その日の唯一の楽みとして、その女に就いていろいろな空想を逞たくましゆうした。恋が成立つて、神楽坂かぐらざかあたりの小待合に連れて行つて、人目を忍んで楽しんだらどう……。細君に知れずに、二人近郊を散歩したらどう……。いや、それどころではない、その時、細君が懐妊しておつたから、不図難産して死ぬ、その後にその女を入れるとしてどうであろう……。……平気で後妻に入れることが出来るだろうかどうかなどと考えて

歩いた。

神戸の女学院の生徒で、生れは備中の新見町びつちゅうで、渠の著作の崇拜者で、名を横山芳子という女から崇拜の情を以て充された一通の手紙を受取つたのはその頃であつた。竹中古城と謂えば、美文的小説を書いて、多少世間に聞えておつたので、地方から来る崇拜者かつごうしや渴仰者の手紙はこれまでも随分多かつた。やれ文章を直してくれの、弟子でしにしてくれのと一々取合つてはいられなかつた。だからその女の手紙を受取つても、別に返事を出そうとまでその好奇心は募らなかつた。けれど同じ人の熱心なる手紙を三通まで貰もらつては、さすがの時雄も注意をせずにはいられなかつた。年は十九だそうだが、手紙の文句から推おして、その表情の巧みなのは驚くべきほどで、いかなることがあつても先生の門下生になつて、一生文学に従事したいとの切なる願望のぞみ。文

字は走り書のすらすらした字で、余程ハイカラの女らしい。返事を書いたのは、例の工場の二階の室で、その日は毎日の課業の地理を二枚書いて止して、長い数尺に余る手紙を芳子に送った。その手紙には女の身として文学に携わることの不心得、女は生理的に母たるの義務を尽さなければならぬ理由、処女にして文学者たるの危険などを縷々として説いて、幾らか罵倒的文辞をも陳べて、これならもう愛想をつかして断念めて了うであろうと時雄は思つて微笑した。そして本箱の中から岡山県の地図を捜して、阿哲郡新見町の所在を研究した。山陽線から高梁川の谷を遡つて奥十数里、こんな山の中にもこんなハイカラの女があるかと思うと、それでも何となくなつかしく、時雄はその附近の地形やら山やら川やらを仔細に見た。

で、これで返辞をよこすまいと思つたら、それどころか、四日

目には更に厚い封書が届いて、紫インキで、青い罫けいの入った西洋紙に横に細字で三枚、どうか将来見捨てずに弟子にしてくれという意味が返す返すも書いてあつて、父母に願つて許可を得たならば、東京に出て、然しかるべき学校に入つて、完全に忠実に文学を学んでみたいとのことであつた。時雄は女の志に感ぜずにはいられなかつた。東京でさえ——女学校を卒業したものでさえ、文学の価値ねうちなどは解らぬものなのに、何もかもよく知つてゐるらしい手紙の文句、早速さつそく返事を出して師弟の關係を結んだ。

それから度々たびたびの手紙と文章、文章はまだ幼稚な点はあるが、癖の無い、すらすらしした、将来発達の見込は十分にあると時雄は思つた。で一度は一度より段々互の氣質が知れて、時雄はその手紙の来るのを待つようになつた。ある時などは写真を送れと言つて遣やらうと思つて、手紙の隅すみに小さく書いて、そしてま

たこれを黒々と塗つて了つた。女性には容色きりようと謂いうものが是非必要である。容色のわるい女はいくら才があつても男が相手に為ない。時雄も内々胸の中で、どうせ文学を遣らうというような女だから、不容色ふびりように相違ないと思つた。けれどなるべくは見られる位の女であつて欲しいと思つた。

芳子が父母に許可ゆるしを得て、父に伴つれられて、時雄の門おとのを訪うたのは翌年の二月で、丁度時雄の三番目の男の児の生れた七夜の日であつた。座敷の隣の室は細君さいじんの産褥さんじよくで、細君は手伝てでんに來ている姉から若い女門下生の美しい容色であることを聞いて少なからず懊惱おうれうした。姉もああいう若い美しい女を弟子でしにしてどうする気だろうと心配した。時雄は芳子と父とを並べて、縷々るるとして文学者の境遇と目的とを語り、女の結婚問題に就あらかじいて予め父親の説たを叩いた。芳子の家は新見町でも第三とは下らぬ豪

家で、父も母も厳格なる基督教信者、母は殊ことにすぐれた信者で、曾かつては同志社女学校に学んだこともあるという。総領の兄は英国へ洋行して、帰朝後は某官立学校の教授となつてゐる。芳子は町の小学校を卒業するとすぐ、神戸に出て神戸の女学院に入り、其処そこでハイカラな女学校生活を送つた。基督教キリストの女学校は他の女学校に比して、文学に対して総すべて自由だ。その頃こそ「魔風恋風」や「金色夜叉」などを読んではならんとの規定も出ていたが、文部省で干渉しない以前は、教場でさえなくば何を読んでも差支さしつかえなかつた。学校に附属した教会、其処そこで祈祷きとうの尊いこと、クリスマスの晩の面白いこと、理想を養うということの味をも知つて、人間の卑いやしいことを隠して美しいことを標榜ひょうぼうするといふ群むれの仲間となつた。母の膝下ひざもとが恋しいとか、故郷ふるさとが懐なつかしいとか言うことは、来た当座こそ切実に辛つらく感じもしたが、

やがては全く忘れて、女学生の寄宿生活をこの上なく面白く思うようになつた。旨味おいしい南瓜かぼちゃを食べさせないと云つては、お鉢はちの飯いしやうゆに醤油しょうゆを懸かけて賄方まかないかたを酷いじめたり、舎監かげひなたのひねくれた老婦の顔色を見て、陰陽かげひなたに物を言つたりする女学生の群の中に入つていては、家庭に養われた少女のように、単純に物を見る事がどうして出来よう。美しいこと、理想を養うこと、虚栄心の高いこと——こういう傾向をいつとなしに受けて、芳子は明治の女学生の長所と短所とを遺憾なく備えていた。

すくなく  
尠すくなくくとも時雄の孤独なる生活はこれによつて破られた。昔の

恋人——今の細君。曾かつては恋人には相違ちがひなかつたが、今は時勢ときせいが移り変つた。四五年來の女子教育の勃興ぼつこう、女子大学の設立、ひさがみ 鹿髪えびちやばかま、海老茶袴えびちやばかま、男と並んで歩くのをはにかむよまげうなものは一人も無くなつた。この世の中に、旧式の丸髻まるまげ、泥鴨あひるのような歩

き振、温順と貞節とより他に何物をも有せぬ細君に甘んじていることは時雄には何よりも情けなかつた。路を行けば、美しい今様の細君を連れての睦じい散歩、友を訪えば夫の席に出て流暢に会話を賑かす若い細君、ましてその身が骨を折って書いた小説を読もうでもなく、夫の苦悶煩悶には全く風馬牛で、子供さえ満足に育てれば好いという自分の細君に対すると、どうしても孤独を叫ばざるを得なかつた。「寂しき人々」のヨハンネスと共に、家妻というものの無意味を感じずにはいられなかつた。これが——この孤独が芳子に由つて破られた。ハイカラな新式な美しい女門下生が、先生！ 先生！ と世にも豪い人のように渴仰して来るのに胸を動かさずに誰がおられようか。

最初の一月ほどは時雄の家に仮寓していた。華やかな声、艶やかな姿、今までの孤独な淋しいかれの生活に、何等の対照！

産褥から出たばかりの細君を助けて、靴下を編む、襟巻を編む、着物を縫う、子供を遊ばせるという生々した態度、時雄は新婚当座に再び帰ったような気がして、家門近く来るとそそるように胸が動いた。門をあけると、玄関にはその美しい笑顔、色彩に富んだ姿、夜も今までは子供と共に細君がいぎたなく眠つて了つて、六畳の室に徒いたずらに明らかな洋燈ランプも、却かえつて侘わびしさを増すの種であつたが、今は如何いかに夜更よふけて帰つて来ても、洋燈の下には白い手が巧に編物の針を動かして、膝ひざの上に色ある毛糸の丸い玉！ 賑かな笑声が牛込の奥の小柴垣こしばがきの中に充ちた。

けれど一月ならずして時雄はこの愛すべき女弟子をその家に置く事の不可能なのを覚つた。従順なる家妻は敢てその事に不服をも唱えず、それらしい様子も見せなかつたが、しかもその気色きしよくは次第に悪くなつた。限りなき笑声の中に限りなき不安の

情が充ち渡った。妻の里方の親戚間などには現に一問題として講究されつつあることを知った。

時雄は種々に煩悶した後、細君の姉の家——軍人の未亡人で恩給と裁縫とで暮している姉の家に寄寓させて、其処から麴町の某女塾に通学させることにした。

## 三

それから今回の事件まで一年半の年月が経過した。

その間二度芳子は故郷を省した。短篇小説を五種、長篇小説を一種、その他美文、新体詩を数十篇作った。某女塾では英語は優等の出来で、時雄の選択で、ツルゲネーフの全集を丸善から買った。初めは、暑中休暇に帰省、二度目は、神経衰弱で、

時々癩しやくのような瘰癧けいれんを起すので、暫しばし故山の静かな処に帰つて休養する方が好いという医師の勧めに従つたのである。

その寓とどしていた家は麴町の土手三番町、甲武こうぶの電車の通る土手際どてぎわで、芳子の書齋はその家での客座敷、八畳の一間、前に往來の頻繁ひんぱんな道路があつて、がやがやと往來の人やら子供やらで喧やかましい。時雄の書齋にある西洋本箱を小さくしたような本箱いつかんぱりが一閑張いっかんぱりの机の傍にあつて、その上には鏡と、紅皿べにざらと、白粉おしろいの罫びんと、今一つシユウソカリの入つた大きな罫がある。これは神経過敏あたまで、頭腦あたまが痛くつて為方しかたが無い時に飲むのだという。本箱には紅葉全集こうよう、近松世話浄瑠璃せわじょうるり、英語の教科書、ことに新しく買ったツルゲネーフ全集が際立つて目に附く。で、未來けいしゅうの閨秀作家は学校から帰つて来ると、机に向つて文を書くというよりは、寧ろむし多く手紙を書くので、男の友達も随分多い。男文字の

手紙も随分来る。中にも高等師範の学生に一人、早稲田大学の学生に一人、それが時々遊びに来たことがあつたそうだ。

麴町土手三番町の一角には、女学生もそうハイカラなのが沢山居ない。それに、市ヶ谷見附の彼方あちらには時雄の妻君の里の家があるのだが、この附近は殊に昔風の商家の娘が多い。で、尠すくなくとも芳子の神戸仕込のハイカラはあたりの人の目を聳そばだたしめた。時雄は姉の言葉として、妻から常に次のようなことを聞される。

「芳子さんにも困つたものですねと姉が今日も言っていましたよ、男の友達が来るのは好いけれど、夜など一緒に二一七（不動）に出かけて、遅くまで帰つて来ないことがあるんですって。そりゃ芳子さんはそんなことは無いのに決っているけれど、世間の口が喧やかましくつて為方しかたが無いと云っていました」

これを聞くと時雄は定きまつて芳子の肩を持つので、「お前達のような旧式の間人には芳子の遣やることなどは判わかりやせんよ。男女が二人で歩いたり話したりさえすれば、すぐあやしいとか変だとか思うのだが、一体、そんなことを思ったり、言ったりするのが旧式だ、今では女も自覚しているから、為なようと思うことは勝手にするさ」

この議論を時雄はまた得意になつて芳子にも説法した。「女子ももう自覚せんければいかん。昔の女のように依頼心を持つていては駄目だ。ズウデルマンのマグダの言つた通り、父の手からすぐに夫の手に移るような意気地なしでは為方が無い。日本の新しい婦人としては、自ら考えて自ら行うようにしなければいかん」こう言つては、イブセンのノラの話や、ツルゲネーフのエレネの話や、露ロシ西シア亜、独ドイ逸ツあたりの婦人の意志と感情と共

に富んでいることを話し、さて、「けれど自覚と云うのは、自省ということをも含んでおるですからな、無闇むやみに意志や自我を振廻しては困るですよ。自分の遣ったことには自分が全責任を帯びる覚悟がなくては」

芳子にはこの時雄の教訓が何より意味があるように聞えて、渴仰いよいよの念が愈々きりすと加わった。基督教の教訓より自由でそして権威があるように考えられた。

芳子は女学生としては身装みなりが派手過ぎた。黄金きんの指環をはめて、流行を趁おつた美しい帯をしめて、すつきりとした立姿は、路傍の人目を惹ひくに十分であつた。美しい顔と云うよりは表情のある顔、非常に美しい時もあれば何だか醜い時もあつた。眼に光りがあつてそれが非常によく働いた。四五年前までの女は感情あはを顕あらわすのに極めて単純で、怒つた容かたちとか笑つた容とか、三

種、四種位しかその感情を表わすことが出来なかつたが、今では情を巧に顔に表わす女が多くなつた。芳子もその一人である。と時雄は常に思った。

芳子と時雄との関係は単に師弟の間柄としては余りに親密であつた。この二人の様子を観察したある第三者の女の一人が妻に向つて、「芳子さんが来てから時雄さんの様子はまるで変りましたよ。二人で話しているところを見ると、魂は二人ともあくがれ渡つてゐるようで、それは本当に油断がなりませんよ」と言つた。他はたから見れば、無論そう見えたに相違なかつた。けれど二人は果してそう親密であつたか、どうか。

若い女のうかれ勝な心、うかれるかと思えばすぐ沈む。些ささい細なことにも胸を動かし、つまらぬことにも心を痛める。恋でもない、恋でなくも無いというようなやさしい態度、時雄は絶え

ず思い惑った。道義の力、習俗の力、機会一度至ればこれを破るのは帛きぬを裂くよりも容易だ。唯ただ、容易たやすに來らぬはこれを破るに至る機会である。

この機会がこの一年の間に尠すくなくとも二度近寄つたと時雄は自分だけで思った。一度は芳子が厚い封書を寄せて、自分の不束ふつつかなこと、先生の高恩に報ゆることが出来ぬから自分は故郷に歸つて農夫の妻になつて田舎いなかに埋れて了しまおうということを涙交りに書いた時、一度は或る夜芳子が一人で留守番をしているところへゆくりなく時雄が行つて訪問した時、この二度だ。初めの時は時雄はその手紙の意味を明かに了解した。その返事をいかに書くべきかに就いて一夜眠らずに懊惱おうのうした。穩かに眠れる妻の顔、それを幾度か窺うかがつて自己の良心のいかに麻痺まひせるかを自ら責めた。そしてあくろ朝贈つた手紙は、嚴乎げんこたる師としての態

度であつた。二度目はそれから二月ほど経つた春の夜、ゆくりなく時雄が訪問すると、芳子は白粉おしろいをつけて、美しい顔をして、火鉢ひばちの前にぼつねんとしていた。

「どうしたの」と訊きくと、

「お留守番ですの」

「姉は何処どこへ行つた？」

「四谷へ買物に」

と言つて、じつと時雄の顔を見る。いかにも艶なまめかしい。時雄はこの力ある一瞥いちべつに意気地なく胸を躍おどらした。二語三語、普通のことを語り合つたが、その平凡なる物語が更に平凡でないことを互に思い知つたらしかつた。この時、今十五分も一緒に話し合つたならば、どうなつたであろうか。女の表情の眼は輝き、言葉は艶なまめき、態度がいかに尋常よつねでなかつた。

「今夜は大変綺麗きれいにしてますね？」

男は態わざと軽く出た。

「え、先程、湯に入りましたのよ」

「大変に白粉が白いから」

「あらまア先生！」と言って、笑って体を斜はすに嬌態きようたいを呈した。

時雄はすぐ帰った。まア好いでしようと芳子はたつて留めたが、どうしても帰ると言うので、名残なごり惜しげに月の夜を其処そこまで送つて来た。その白い顔には確かにある深い神秘が籠こめられてあつた。

四月に入ってから、芳子は多病で蒼白あおしろい顔をして神経過敏に陥っていた。シュウソカリを余程多量に服してもどうも眠られぬと困こまっていた。絶えざる欲望と生殖の力とは年頃の女を誘うのに躊躇ちゆうちゆうしない。芳子は多く薬に親しんでいた。

四月末に帰国、九月に上京、そして今回の事件が起つた。

今回の事件とは他<sup>ほか</sup>でも無い。芳子は恋人を得た。そして上京の途次、恋人と相携えて京都嵯峨<sup>さが</sup>に遊んだ。その遊んだ二日の日数が出発と着京との時日に符合せぬので、東京と備中との間に手紙の往復があつて、詰問した結果は恋愛、神聖なる恋愛、二人は決して罪を犯してはおらぬが、将来は如何<sup>いか</sup>にしてもこの恋を遂げたいとの切なる願望<sup>ねがい</sup>。時雄は芳子の師として、この恋の証人として一面月下氷人<sup>げっかひようじん</sup>の役目を余儀なくさせられたのであつた。

芳子の恋人は同志社の学生、神戸教会の秀才、田中秀夫、年二十一。

芳子は師の前にその恋の神聖なるを神懸けて誓つた。故郷の

親達は、学生の身で、ひそかに男と嵯峨に遊んだのは、既にその精神の墮落であると云つたが、決してそんな汚れた行為はない。互に恋を自覚したのは、寧ろ京都で別れてからで、東京に帰つて来てみると、男から熱烈なる手紙が来ていた。それで始めて将来の約束をしたような次第で、決して罪を犯したようなことは無いと女は涙を流して言つた。時雄は胸に至大の犠牲を感じながらも、その二人の所謂神聖なる恋の爲めに力を尽すべく余儀なくされた。

時雄は悶え<sup>もた</sup>ざるを得なかつた。わが愛するものを奪われたということは甚<sup>はなは</sup>だしくその心を暗くした。元より進んでその女弟子を自分の恋人にする考は無い。そういう明らかな定つた考があれば前に既に二度までも近寄つて来た機会を攫<sup>つか</sup>むに於<sup>おい</sup>て敢て躊躇<sup>ちゆうちよ</sup>するところは無い筈<sup>はず</sup>だ。けれどその愛する女弟子、淋<sup>さび</sup>しい

生活に美しい色彩を添え、限りなき力を添えてくれた芳子を、突然人の奪い去るに任すに忍びようか。機会を二度まで攫むことは躊躇したが、二度来る機会、四度来る機会を待って、新なる運命と新なる生活を作りたいとはかれの心の底の底の微かなる願であつた。時雄は悶えた、思い乱れた。妬みと惜しみと悔恨との念が一緒になつて旋風のように頭脳あたまの中を回転した。師としての道義の念もこれに交つて、益ますます炎を熾さかんにした。わが愛する女の幸福の為めという犠牲の念も加わつた。で、夕暮の膳ぜんの上の酒は夥おびただしく量を加えて、泥鴨あひるの如く酔よごつて寝た。

あくる日は日曜日わびの雨、裏の森にざんざん降つて、時雄の為めには一倍に侘わびしい。櫻けやきの古樹に降りかかる雨の脚あし、それが実に長く、限りない空から限りなく降つているとしか思われない。時雄は読書する勇氣も無い、筆を執る勇氣もない。もう秋で冷々ひえびえ

と背中の冷たい籐椅子とういすに身を横よこえつつ、雨の長い脚を見ながら、今回の事件からその身の半生のことを考えた。かれの経験にはこういう経験が幾度もあつた。一步の相違で運命の唯中に入ることが出来ずに、いつも圏外あじわに立たせられた淋しい苦悶くもん、その苦しい味をかれは常に味あじわつた。文学の側でもそうだ、社会の側でもそうだ。恋、恋、恋、今になつてもこんな消極的な運命に漂わされていくかと思うと、その身の意気地なしと運命のつたないことがひしひしと胸に迫つた。ツルゲネーフのいわゆる Superfluous man だと思つて、その主人公の儂はかない一生を胸に繰返した。

寂寥さびしに堪たえず、午ひるから酒を飲のみむと言出した。細君の支度さかの為ためようが遅いのでぶつぶつ言つていたが、膳ぜんに載のせられた肴さかながままずいので、遂ついに癩癩かんしやくを起して、自棄やけに酒を飲んだ。一本、二本と徳利とくの数は重かさなつて、時雄は時の間まに泥どろの如く酔つた。細君に



嵐あらしのみとやおぼすらん。

その嵐よりいやあれに

その塵よりも乱れたる

恋のかばねを暁の

歌を半ばにして、細君の被かけた蒲団ふとんを着たまま、すつくと立上つて、座敷の方へ小山の如く動いて行つた。何処へ？ 何処へいらつしやるんです？ と細君は気が気でなくその後を追つて行つたが、それにも関かまわず、蒲団を着たまま、廁かわやの中に入ろうとした。細君は慌あわてて、

「貴郎あなた、貴郎、酔つぱらつてはいやですよ。そこは手水場ちようずばです

よ

突如いきなり蒲団を後から引いたので、蒲団は廁の入口で細君の手に残つた。時雄はふらふらと危く小便をしていたが、それがすむ

と、突如いきなりどう鞭と厠の中に横に寝てしまった。細君が汚きたながつて頻しきりに揺ゆすつたり何かしたが、時雄は動こうとも立とうとも為ない。そうかと云つて眠つたのではなく、赤土のような顔に大きい鋭い目を明あいて、戸外おもてに降り頻しきる雨をじつと見ていた。

## 四

時雄は例刻をてくてくと牛込矢来町の自宅に帰つて来た。

渠かれは三日間、その苦悶くもんと戦つた。渠は性として惑溺わくできすること

が出来ぬ或る一種の力を有もつている。この力の為めに支配されるのを常に口惜しく思っているのではあるが、それでもいつか負しまけて了う。征服されて了う。これが為め渠はいつも運命の圏外なに立つて苦しい味を嘗なめさせられるが、世間からは正しい人、

信賴するに足る人と信じられている。三日間の苦しい煩悶はんもん、これとにかく渠はその前途を見た。二人の間の關係は一段落を告げた。これからは、師としての責任を尽して、わが愛する女の幸福の爲めを謀はかるばかりだ。これはつらい、けれどつらいのが人生だライフ！　と思ひながら歸つて来た。

門をあけて入ると、細君が迎えに出た。残暑の日はまだ暑く、洋服の下襦袢したじゅばんがびつしより汗にぬれている。それを糊のりのついた白地の単衣ひとえに着替えて、茶の間の火鉢ひばちの前に坐ると、細君はふと思ひ附いたように、筆筒たんすの上の一封の手紙を取出し、

「芳子さんから」  
と言つて渡した。

急いで封を切つた。巻紙の厚いのを見ても、その事件に関するの用事に相違ない。時雄は熱心に読下した。

言文一致で、すらすらとこの上ない達筆。

先生——

実は御相談に上りたいと存じましたが、余り急でしたものでしたから、独断で実行致しました。

昨日四時に田中から電報が参りまして、六時に新橋の停車場に着くとのことですので、私はどんなに驚きましたか知れません。

何事も無いのに出て来るような、そんな軽率な男でないと思ひ、許しておりますだけに、一層甚はなはだしく氣を揉もみました。先生、許して下さい。私はその時刻に迎えに参りましたので

す。逢あつて聞きますと、私の一伍一いちぶしじゅう一いちを書いた手紙を見て、非常に心配して、もしこの事があつた為め万一郷里つに伴れて帰られるようなことがあつては、自分が済まぬと言うの

で、学事をも捨てて出京して、先生にすっかりお打明申して、お詫も申上げ、お情にも縋すがつて、万事円満に参るようにと、そういう目的で急に出て参ったとのことで御座います。それから、私は先生にお話し申した一伍一什、先生のお情深い言葉、将来までも私等二人の神聖な真面目まじめな恋の証人とも保護者ともなつて下さるということを話しましたところ、非常に先生の御情に感激しまして、感謝の涙に暮れました次第で御座います。

田中は私の余りに狼狽ろうばいした手紙に非常に驚いたとみえまして、十分覚悟をして、万一破壊の暁にはと言つた風なことも決心して参りましたので御座います。万一の時にはあの時嵯峨さがと一緒に参つた友人を証人にして、二人の間が決して汚けがれた関係の無いことを弁明し、別れて後互に感じた二人

の恋愛をも打明けて、先生にお縋り申して郷里の父母の方へも逐一言ちくいちつて頂こうと決心して参りましたそうです。けれどこの間の私の無謀で郷里の父母の感情を破っている矢先、どうしてそんなことを申して遣つかわされましょう。今は少時しばらく沈黙して、お互に希望を持つて、専心勉強に志し、いつか折を見て——或あるいは五年、十年の後かも知れません——打明けて願う方が得策だと存じまして、そういうことに致しました。先生のお話をも一切話して聞かせました。で、用事が済んだ上は帰した方が好いのですけれど、非常に疲れている様子を見ましては、さすがに直ちに引返すようにとも申兼ねました。(私の弱いのを御許し下さいまし) 勉強中、実際問題に触れてはならぬとの先生の御教訓は身にしみて守るつもりで御座いますが、一先ひとまず、旅籠屋はたごやに落着かせ

まして、折角出て来たものですから、一日位見物しておいでなさいと、つい申してしまいました。どうか先生、お許し下さいまし。私共も激しい感情の中に、理性も御座いますから、京都でしたような、仮りにも常識を外れた、他人から誤解されるようなことは致しません。誓つて、決して致しません。末ながら奥様にも宜しく申上げて下さいまし。

芳子

先生 御もと

この一通の手紙を読んでいる中、さまざまの感情が時雄の胸を火のように燃えて通った。その田中という二十一の青年が現にこの東京に來ている。芳子が迎えに行つた。何をしたか解らん。この間言つたこともまるで虚言うそかも知れぬ。この夏期の休

暇に須磨<sup>すま</sup>で落合<sup>おちあ</sup>った時から出来<sup>でき</sup>ていて、京都での行為もその望を満<sup>み</sup>す為<sup>ため</sup>め、今度も恋<sup>こ</sup>しさに堪<sup>た</sup>え兼ね<sup>かね</sup>て女の後<sup>あと</sup>を追<sup>お</sup>つて上京<sup>じやうきやう</sup>したのかも知<sup>し</sup>れん。手<sup>て</sup>を握<sup>にぎ</sup>つたらう。胸<sup>むね</sup>と胸<sup>むね</sup>とが相触<sup>あひふ</sup>れたらう。人<sup>ひと</sup>が見<sup>み</sup>ていぬ旅籠<sup>りやうら</sup>屋<sup>や</sup>の二階<sup>にがい</sup>、何<sup>なに</sup>を為<sup>な</sup>ているか解<sup>と</sup>らぬ。汚<sup>よご</sup>れる汚<sup>よご</sup>れぬのも刹那<sup>せつな</sup>の間<sup>ま</sup>だ。こ<sup>こ</sup>う思<sup>おも</sup>うと時雄<sup>ときゆう</sup>は堪<sup>た</sup>ま<sup>ま</sup>らなくな<sup>な</sup>つた。「監督<sup>かんとく</sup>者の責任<sup>せきにん</sup>にも関<sup>か</sup>する！」と腹<sup>はら</sup>の中<sup>なか</sup>で絶叫<sup>ぜつけう</sup>した。こ<sup>こ</sup>うしてはおかれぬ、こ<sup>こ</sup>うい<sup>い</sup>う自由<sup>じゆう</sup>を精神<sup>せいしん</sup>の定<sup>じやう</sup>ま<sup>ま</sup>らぬ女<sup>に</sup>に与<sup>よ</sup>えておくことは出来<sup>でき</sup>らん。監督<sup>かんとく</sup>せんけ<sup>ん</sup>ければならん、保<sup>ほ</sup>護<sup>ご</sup>せんけ<sup>ん</sup>りやならん。私<sup>わが</sup>共<sup>ども</sup>は熱情<sup>ねつき</sup>もあるが理性<sup>りせい</sup>がある！ 私<sup>わが</sup>共<sup>ども</sup>とは何<sup>なに</sup>だ！ 何<sup>なに</sup>故<sup>ゆ</sup>私<sup>わが</sup>とは書<sup>か</sup>かぬ、何<sup>なに</sup>故<sup>ゆ</sup>複<sup>ふく</sup>数<sup>すう</sup>を用<sup>もち</sup>いた？ 時雄<sup>ときゆう</sup>の胸<sup>むね</sup>は嵐<sup>あらし</sup>のよう<sup>よう</sup>に乱<sup>みだ</sup>れた。着<sup>き</sup>いたのは昨日<sup>けふ</sup>の六<sup>む</sup>時<sup>じ</sup>、姉<sup>あね</sup>の家<sup>いへ</sup>に行<sup>い</sup>つて聞<sup>き</sup>き糺<sup>ただ</sup>せば昨夜<sup>けふ</sup>何時<sup>なんじ</sup>頃<sup>ころ</sup>に帰<sup>かえ</sup>つたか解<sup>と</sup>るが、今日<sup>けふ</sup>はど<sup>ど</sup>うした、今<sup>いま</sup>はど<sup>ど</sup>うしてゐる？

細君<sup>こまぎみ</sup>の心<sup>こころ</sup>を尽<sup>つく</sup>した晚餐<sup>ばんさん</sup>の膳<sup>ぜん</sup>には、鮪<sup>まぐろ</sup>の新鮮<sup>しんせん</sup>な刺身<sup>さしみ</sup>に、青紫蘇<sup>あおじそ</sup>

の薬味を添えた冷豆腐ひややつこ、それを味う余裕もないが、一盃いっぱいは一盃いっぱいと盞さかずきを重ねた。

細君は末の児を寝かして、火鉢の前に来て坐つたが、芳子の手紙の夫の傍にあるのに眼を附けて、

「芳子さん、何て言つて来たのです？」

時雄は黙つて手紙を投げて遣つた、細君はそれを受取りながら、夫の顔をじろりと見て、暴風の前に来る雲行の甚だ急なのを知つた。

細君は手紙を讀終つて巻きかえしながら、

「出て来たのですね」

「うむ」

「ずっと東京に居るんでしょうか」

「手紙に書いてあるじゃないか、すぐ帰すツて……」

「帰るでしようか」

「そんなこと誰が知るものか」

夫の語気が烈はげしいので、細君は口を噤つぶんで了った。少時しばらくた経つてから、

「だから、本当に厭いやさ、若い娘の身で、小説家になるなんぞツて、望む本人も本人なら、よこす親達も親達ですからね」

「でも、お前は安心したろう」と言おうとしたが、それは止よして、

「まあ、そんなことはどうでも好いさ、どうせお前達には解らんのだから……それよりも酌でもしたらどうだ」

温順な細君は徳利を取上げて、京焼の盃さかずきに波々と注ぐ。

時雄は頻しきりに酒を呷あおった。酒でなければこの鬱うつを遣るに堪えぬといわぬばかりに。三本目に、妻は心配して、

「この頃はどうか為ましたね」

「何故？」

「酔つてばかりいるじゃありませんか」

「酔うということがどうかしたのか」

「そうでしょう、何か気に懸ることがあるからでしょう。芳子さんのことなどはどうでも好いじゃありませんか」

「馬鹿！」

と時雄は一喝かつした。

細君はそれにも懲りずに、

「だつて、余り飲んでは毒ですよ、もう好い加減になさい、また手水場ちようずばにでも入つて寝ると、貴郎あなたは大きいから、私と、お鶴（下女）の手ぐらいではどうにもなりやしませんからさ」

「まあ、好いからもう一本」

で、もう一本を半分位飲んだ。もう酔は余程廻つたらしい。顔の色は赤銅色しやくどういろに染つて眼が少しく据つていた。急に立上つて、

「おい、帯を出せ！」

「何処どこへいらつしやる」

「三番町まで行つて来る」

「姉の処？」

「うむ」

「およしなさいよ、危あぶないから」

「何アに大丈夫だ、人の娘を預つて監督せずなげやりに投遣なげやりにしてはおかれん。男がこの東京に来て一緒に歩いたり何かしているのを見ぬ振をしてはおかれん。田川（姉の家の姓）に預けておいても不安心だから、今日、行つて、早かつたら、芳子を家に連れて来る。二階を掃除しておけ」

「家に置くんですか、また……」

「勿論」

細君は容易に帯と着物とを出そうともせぬので、

「よし、よし、着物を出さんのなら、これで好い」と、白地の  
単衣ひとえに唐縮緬とうちりめんの汚れたへこ帯、帽子も被かぶらずに、そのままに急  
いで戸外へ出た。「今出しますから……本当に困つて了う」とい  
う細君の声が後に聞えた。

夏やかまの日はもう暮れ懸つていた。矢来の酒井の森には烏からすの音が  
喧やかましく聞える。どの家でも夕飯が済んで、門口に若い娘の白い  
顔も見える。ボールを投げている少年もある。官吏らしい鱗髭どじょうひげ  
の紳士ひさしがみが底髪ひさしがみの若い細君を伴つれて、神楽坂かぐらざかに散歩に出懸けるの  
にも幾組か邂逅でつくわした。時雄は激昂げつこうした心と泥酔した身体はげとに烈  
しく漂あたりわされて、四辺あたりに見ゆるものが皆な別の世界のもののよ

うに思われた。両側の家も動くよう、地も脚の下に陥るよう、天も頭の上に蔽おほい冠かぶさるように感じた。元からさ程強い酒量でないのに、無闇むやみにぐいぐいと呷あおつたので、一時に酔が発したのであろう。ふと露西亞ロシアの賤民せんみんの酒に酔って路傍に倒れて寝ているのを思い出した。そしてある友人と露西亞の人間はこれだから豪えらい、惑溺わくだきするなら飽あくまで惑溺せんければ駄目だと言ったことを思いだした。馬鹿な！ 恋に師弟の別があつて堪るものかと口へ出して言った。

中根坂を上つて、士官学校の裏門から佐内坂の上まで来た頃は、日はもうとつぷりと暮れた。白地の浴衣ゆかたがぞろぞろと通る。煙草屋たばこやの前に若い細君が出ている。氷屋の暖簾のれんが涼しそうに夕風に靡なびく。時雄はこの夏の夜景を朧おぼろげに眼には見ながら、電信柱に突当つて倒れそうにしたり、浅い溝みぞに落ちて膝頭ひざがしらをついた

り、職工体ていの男に、「酔漢奴よつばらいぬめ！ しつかり歩け！」と罵ののられたりした。急に自ら思いついたらしく、坂の上から右に折れて、市ヶ谷八幡の境内へと入った。境内には人の影もなく寂寥ひっそりとしていた。大きい古い櫟けやきの樹と松の樹とが蔽い冠さつて、左の隅すみに珊瑚樹さんしゅうじゆの大きいのが繁しげつていた。処々の常夜燈はそろそろ光を放ち始めた。時雄はいかにしても苦しいので、突如いきなりその珊瑚樹の蔭に身を躲かくして、その根本の地上に身を横よこたえた。興奮した心の状態、奔放な情と悲哀の快感とは、極端までその力を発展して、一方痛切に嫉妬しつとの念に驅かられながら、一方冷淡に自己の状態を客観した。

初めて恋するような熱烈な情は無論なかつた。盲目にその運命に従うと謂いうよりは、寧ろ冷むしひややかにその運命を批判した。熱い主観の情と冷めたい客観の批判とが絡より合せた糸のように固く

結び着けられて、一種異様の心の状態を呈した。

悲しい、実に痛切に悲しい。この悲哀は華やかな青春の悲哀でもなく、単に男女の恋の上の悲哀でもなく、人生の最奥に秘<sup>ひそ</sup>んでいるある大きな悲哀だ。行く水の流、咲く花の凋落<sup>ちようらく</sup>、この自然の底に蟠<sup>わだかま</sup>れる抵抗すべからざる力に触れては、人間ほど儂<sup>はかな</sup>い情ないものはない。

茫然<sup>おうぜん</sup>として涙は時雄の鬚面<sup>ひげづら</sup>を伝った。

ふとある事が胸に上<sup>のぼ</sup>った。時雄は立上つて歩き出した。もう

全く夜になった。境内の処々に立てられた硝子燈<sup>ガラスとう</sup>は光を放つて、

その表面の常夜燈という三字がはつきり見える。この常夜燈という三字、これを見てかれは胸を衝いた。この三字をかれは曾<sup>かつ</sup>

て深い懊惱<sup>おうのう</sup>を以て見たことは無いだろうか。今の細君が大きい

桃割<sup>ももわれ</sup>に結つて、このすぐ下の家に娘で居た時、渠<sup>かれ</sup>はその微かな琴<sup>かす</sup>

の音ねの髣髴ほうふつをだに得たいと思つてよくこの八幡の高台に登つた。かの女を得なければ寧いっそ南洋の植民地に漂泊しようというほどの熱烈な心を抱いだいて、華表とりい、長い石階いしだん、社殿、俳句の懸行燈かけあんどん、この常夜燈の三字にはよく見入つて物を思つたものだ。その下には依然たる家屋、電車の轟とどろきこそおりおり寂寞せきぼくを破つて通るが、その妻の実家の窓には昔と同じように、明かに燈の光が輝いていた。何たる節操なき心ぞ、僅わずかに八年の年月を閲けみしたばかりであるのに、こうも変ろうとは誰が思おう。その桃割姿まるまげすがたにして、楽しく暮したその生活がどうしてこういう荒涼たる生活に変つて、どうしてこういう新しい恋を感じずるようになったか。時雄は我ながら時の力の恐ろしいのを痛切に胸に覺えた。けれどその胸にある現在の事實は不思議にも何等の動揺をも受けなかつた。

「矛盾でもなんでも為方しかたがない、その矛盾、その無節操、これが事実だから為方がない、事実！ 事実！」

と時雄は胸の中に繰返した。

時雄は堪え難い自然の力の圧迫に圧せられたもののように、再び傍の口ハ台に長い身を横えた。ふと見ると、赤銅しゃくどうのような色をした光芒ひかりの無い大きな月が、お濠ほりの松の上に音も無く昇っていた。その色、その状かたち、その姿がいかにも侘わびしい。その侘わびしさはその身の今の侘わびしさによく適かなっていると時雄は思つて、また堪え難い哀愁がその胸に漲みなぎり渡つた。

酔は既に醒さめた。夜露は置始さめた。

土手三番町の家の前に来た。

覗のぞいてみたが、芳子の室に燈火の光が見えぬ。まだ帰つて来ぬとみえる。時雄の胸はまた燃えた。この夜、この暗い夜に恋

しい男と二人！ 何をしているか解らぬ。こういう常識を欠いた行為を敢てして、神聖なる恋とは何事？ 汚れたる行為の無いのを弁明するとは何事？

すぐ家に入ろうとしたが、まだ当人が帰っておらぬのに上つても為方が無いと思つて、その前を真直まつすぐに通り返けた。女と摩違すれちがう度たびに、芳子ではないかと顔を覗きつつ歩いた。土手の上、松の木蔭、街道の曲り角、往来の人に怪まるるまで彼方あつちこつち此方を徘徊はいかいした。もう九時、十時に近い。いかに夏の夜であるからと言つて、そう遅くまで出歩いている筈はずが無い。もう帰つたに相違ないと思つて、引返して姉の家に行つたが、矢張りまだ帰っていない。

時雄は家に入った。

奥の六畳に通るや否、

「芳さんはどうしました？」

その答より何より、姉は時雄の着物に夥おびただしく泥の着いているのに驚いて、

「まあ、どうしたんです、時雄さん」

明かな洋燈ランプの光で見ると、なるほど、白地の浴衣ゆかたに、肩、膝ひざ、腰きらの嫌きらいなく、夥おびただしい泥痕どろあと！

「何アに、其処そこでちよつと転んだものだから」

「だって、肩まで粘っいているじゃありませんか。また、酔よッぱらつたんでしょう」

「何アに……」

と時雄は強しいて笑つてまぎらした。

さて時を移さず、

「芳さん、何処どこに行つたんです」

「今朝、ちよつと中野の方にお友達と散歩に行つて来ると行つて出たきりですがね、もう帰つて来るでしょう。何か用？」

「え、少し……」と言つて、「昨日は帰りは遅かったですか」

「いいえ、お友達を新橋に迎えに行くんだつて、四時過に出かけて、八時頃に帰つて来ましたよ」

時雄の顔を見て、

「どうかしたのですの？」

「何アに……けれどねえ姉さん」と時雄の声は改まった。「実は姉さんにおまかせしておいても、この間の京都のようなことが又あると困るですから、芳子を私の家において、十分監督しようと思ふんですがね」

「そう、それは好いですよ。本当に芳子さんはああいうしつかり者だから、私みたいな無教育のものでは……」

「いや、そういう訳でも無いですがね。余り自由にさせ過ぎて  
も、却かえつて当人の為にならんですから、一つ家に置いて、十分  
監督してみようと思うんです」

「それが好いですよ。本当に、芳子さんにもね……何処と悪い  
ことのない、発明な、利口な、今の世には珍らしい方ですけれ  
ど、一つ悪いことがあつてね、男の友達と平気で夜歩いたりな  
んかするんですからね。それさえ止すと好いんだけれどとよく  
言うのですの。すると芳子さんはまた小母さんの旧弊が始まっ  
たつて、笑っているんだもの。いつかなぞも余り男と一緒に歩  
いたり何かするものだから、角かどの交番でね、不審にしてね、角袖かくそで  
巡査が家の前に立っていたことがあつたと云いますよ。それは  
そんなことは無いんだから、構いはしませんけどもね……」  
「それはいつのことです？」

「昨年の暮でしたかね」

「どうもハイカラ過ぎて困る」と時雄は言ったが、時計の針の既に十時半の処を指すのを見て、「それにしてもどうしたんだらう。若い身空で、こう遅くまで一人で出て歩くと言うのは？」

「もう帰つて来ますよ」

「こんなことは幾度もあるんですか」

「いいえ、減多めったにありはしませんよ。夏の夜だから、まだ宵の口位に思つて歩いてゐるんですよ」

姉は話しながら裁縫しじこの針を止めぬのである。前に鴨脚いちようの大き

い裁物板たちものいたが据えられて、彩絹きぬの裁片たちきれや糸いとや鋏はさみやが順序あたりなく四面

に乱れている。女物の美しい色に、洋燈ランプの光が明かに照り渡つ

た。九月中旬の夜は更ふけて、稍々やや肌寒はだく、裏の土手下を甲武の貨物汽車がすさまじい地響を立てて通る。

下駄の音がする度に、今度こそは！ 今度こそは！ と待渡つたが、十一時が打つて間もなく、小きざみな、軽い後齒あとばの音が静かな夜を遠く響いて来た。

「今度のこそ、芳子さんですよ」

と姉は言つた。

果してその足音が家の入口の前に留つて、がらがらと格子こうしが開く。

「芳子さん？」

「ええ」

と艶あでやかな声がする。

玄関から丈たけの高い庇髪ひさがみの美しい姿がすつと入つて来たが、

「あら、まア、先生！」

と声を立てた。その声には驚愕おどろきと当惑の調子が十分に籠こもつて

いた。

「大変遅くなつて……」と言つて、座敷と居間との間の闕しきいの処かおつきに来て、半ば坐つて、ちらりと電光のように時雄の顔色を窺うかがつたが、すぐ紫の袱紗ふくさに何か包んだものを出して、黙つて姉の方おしやに押遣おしやつた。

「何ですか……お土産みやげ？　いつもお気の毒ね？」

「いいえ、私も召上るんですもの」

と芳子は快活に言つた。そして次の間へ行こうとしたのを、

無理に洋燈ランプの明るい眩まぶしい居間の一隅かたすみに坐らせた。美しい姿、

当世流の庇髮ひさしがみ、派手なネルにオリイヴ色の夏帯を形よく緊しめて、

少し斜はすに坐つた艶やかさ。時雄はその姿と相對して、一種状じようす

べからざる満足を胸に感じ、今までの煩悶はんもんと苦痛とを半ば忘れ

て了つた。有力な敵があつても、その恋人をだに占領すれば、

それで心の安まるのは恋する者の常態である。

「大變に遅くなつて了つて……」

いかにも遣瀨やるせないというように微かすかに弁解した。

「中野へ散歩に行つたツて？」

時雄は突如として問うた。

「ええ……」芳子は時雄の顔色をまたちらりと見た。

姉は茶を淹いれる。土産の包を開くと、姉の好きな好きなシユウクリーム。これはマアお旨いしいと姉の声。で、暫しばらく一座はそれに氣を取られた。

少しばらく時してから、芳子が、

「先生、私の帰るのを待つていて下さつたの？」

「ええ、ええ、一時間半位待つたのよ」

と姉そばが傍から言つた。

で、その話が出て、都合さえよくば今夜からでも——荷物は後からでも好いから——一緒に伴つれて行く積りで来たということを話した。芳子は下を向いて、点うなず頭うなずいて聞いていた。無論、その胸には一種の圧迫を感じたに相違ないけれど、芳子の心にしては、絶対に信頼して——今回の恋のことにも全心を挙げて同情してくれた師の家に行つて住むことは別はなはだに甚はなはだしい苦痛でも無かつた。寧むじろ以前からこの昔風の家同居しているのを不快に思つて、出来るならば、初めのように先生の家にと願つていたのであるから、今の場合でなければ、かえつて大おおに喜んだのであるように……

時雄は一刻も早くその恋人のことを聞き糺きたしたかつた。今、その男は何処どこにいる？ 何時いつ京都に帰るか？ これは時雄に取つては実に重大な問題であつた。けれど何も知らぬ姉の前で、打

明けて問う訳にも行かぬので、この夜は露ほどもそのことを口に出さなかつた。一座は平凡な物語に更よけた。

今夜にもと時雄の言出したのを、だつて、もう十二時だ、明日にした方が宜よかろうとの姉の注意。で、時雄は一人で牛込に帰ろうとしたが、どうも不安心で為方がないような気がしたので、夜の更けたのを口実に、姉の家に泊つて、明朝早く一緒に行くことにした。

芳子は八畳に、時雄は六畳に姉と床を並べて寝た。やがて姉の小さい鼾いびきが聞えた。時計は一時をカンと鳴つた。八畳では寝つかれぬと覺しく、おりおり高い長大息ためいきの氣勢けはいがする。甲武の貨物列車すまが凄すまじい地響を立てて、この深夜を独ひとり通る。時雄も久しく眠られなかつた。

翌朝時雄は芳子を自宅に伴った。二人になるより早く、時雄は昨日の消息を知ろうと思つたけれど、芳子が低頭勝うつむきがちに悄然しようぜんとして後について来るのを見ると、何となく可哀かわいそうになつて、胸に苛々いらいらする思を畳みながら、黙して歩いた。

佐内坂を登り了おわると、人通りが少くなつた。時雄はふと振返つて、「それでどうしたの？」と突如として訊たずねた。

「え？」

反問した芳子は顔を曇らせた。

「昨日の話さ、まだ居るのかね」

「今夜の六時の急行で帰ります」

「それじゃ送つて行かなくつてはいけないじゃないか」

「いいえ、もう好いんですの」

これで話は途絶えて、二人は黙つて歩いた。

矢来町の時雄の宅、今まで物置にしておいた二階の三畳と六畳、これを綺麗きれいに掃除して、芳子の住居すまいとした。久しく物置——子供の遊び場あそびばにしておいたので、塵埃ちりが山のように積つていたが、箒ほうきをかけ雑巾ぞうきんをかけ、雨のしみの附いた破れた障子を貼り更はえると、こうも変わるものかと思われるほど明るくなつて、裏の酒井の墓はか塋の大樹の繁茂しげりが心地よき空翠みどりをその一室ひとむろに漲みなぎらした。隣家の葡萄棚ぶどうだな、打捨てて手を入れようとせぬ庭の雑草の中に美人草の美しく交つて咲さいているのも今更に目につく。時雄はさる画家の描いた朝顔の幅ふくを選んで床に懸けんけ、懸花瓶けんかびんには後おくれ咲さの薔薇ばらの花を挿さした。午頃ひるごろに荷物が着いて、大きな支那靴しなかばん、柳行李やなぎごうり、信玄袋、本箱、机、夜具、これを二階に運ぶのには中々

骨が折れる。時雄はこの手伝いに一日社を休むべく余儀なくされたのである。

机を南の窓の下、本箱をその左に、上に鏡やら紅皿べにざらやら罌びんやらを順序よく並べた。押入の一方には支那鞆、柳行李、更紗さらざの蒲団ふとん夜具の一组を他の一方に入れようとした時、女の移香うつりがが鼻を撲うつたので、時雄は変な気になった。

午後二時頃には一室が一先ひとまず整頓せいとんした。

「どうです、此処ここも居心は悪くないでしょう」時雄は得意そうに笑つて、「此処ここに居て、まア緩ゆるくり勉強するです。本当に實際問題に触れてつまらなく苦勞したつて為方がないですからねえ」  
「え……」と芳子は頭を垂れた。

「後で詳しく聞きましたようが、今の中うちは二人共じつとして勉強していなくては、為方がないですからね」

「え……」と言つて、芳子は顔を挙げて、「それで先生、私達もそう思つて、今はお互に勉強して、将来に希望を持つて、親の許諾ゆるしをも得たいと存じておりますの！」

「それが好いです。今、余り騒ぐと、人にも親にも誤解されて了つて、折角の真面目な希望も遂げられなくなりますから」

「ですから、ね、先生、私は一心になつて勉強しようと思ひますの。田中もそう申しておりました。それから、先生に是非お目にかかつてお礼を申上げなければ濟まないと申しておりますたけれど……よく申上げてくれッて……」

「いや……」

時雄は芳子の言葉の中に、「私共」と複数を遣つかうのと、もう公然許嫁いいなづけの約束でもしたかのように言うのとを不快に思った。まだ、十九か二十の妙齡の処女が、こうした言葉を口にするのを

怪しんだ。時雄は時代の推移おしうつつたのを今更のよう感じた。当世の女学生気質かたぎのいかに自分等の恋した時代の処女気質と異っているかを思った。勿論もちろん、この女学生気質を時雄は主義の上、趣味の上から喜んで見ていたのは事実である。昔のような教育を受けては、到底今の明治の男子の妻としては立って行かれぬ。女子も立たねばならぬ、意志の力を十分に養わねばならぬとはかれの持論である。この持論をかれは芳子に向つても尠すくなからず鼓吹した。けれどこの新派のハイカラの実行を見てはさすがに眉まゆを顰ひそめずにはいられなかつた。

男からは国府津こうつづの消印で帰途に就ついたという端書はがきが着いて翌日三番町の姉の家から届けて来た。居間の二階には芳子が居て、呼べば直ぐ返事をして下りて来る。食事には三度三度膳を並べ

て団欒だんらんして食う。夜は明るい洋燈ランプを取巻いて、賑にぎわしく面白く語り合う。靴下は編んでくれる。美しい笑顔を絶えず見せる。時雄は芳子を全く占領して、とにかく安心もし満足もした。細君も芳子に恋人があるのを知ってから、危険の念、不安の念を全く去つた。

芳子は恋人に別れるのが辛つらかった。成ろうことなら一緒に東京に居て、時々顔をも見、言葉をも交えたかった。けれど今の際それは出来難いことを知っていた。二年、三年、男が同志社を卒業するまでは、たまさかの雁かりの音信おとずれをたよりに、一心不乱に勉強しなければならぬと思つた。で、午後からは、以前の如く麴町こうじまちの某英学塾に通い、時雄も小石川の社に通つた。

時雄は夜などおりおり芳子を自分の書齋に呼んで、文学の話、小説の話、それから恋の話をすることがある。そして芳子の為

めにその将来の注意を与えた。その時の態度は公平で、率直で、同情に富んでいて、決して泥酔して厠かわやに寝たり、地上に横たわったりした人とは思われない。さればと言つて、時雄はわざとそういう態度にするのではない、女に對むかつている刹那せつな——その愛した女の歡心を得るには、いかなる犠牲も甚だ高価に過ぎなかつた。

で、芳子は師を信頼した。時期が来て、父母にこの恋を告ぐる時、旧思想と新思想と衝突するようなことがあつても、この惠深い師の承認を得さえすればそれで沢山だとまで思った。

九月は十月になつた。さびしい風が裏の森を鳴らして、空の色は深く碧あおく、日の光は透過すきとおつた空氣に射渡さしわたつて、夕の影が濃くあたりを隈くまどるようになった。取り残した芋いもの葉に雨は終日降りしき降頻ふりしきつて、八百屋やおやの店には松茸まつたけが並べられた。垣の虫の声は露

に衰えて、庭の桐きりの葉も脆もろくも落ちた。午前の中の一時間、九時より十時までを、ツルゲネーフの小説の解釈、芳子は師のかがやく眼の下に、机に斜はすに坐つて、「オン、ゼ、イブ」の長い長い物語に耳を傾けた。エレネの感情に烈はげしく意志の強い性格と、その悲しい悲壮なる末路とは如何いかにかの女を動かしたか。芳子はエレネの恋物語を自分に引くらべて、その身を小説の中に置いた。恋の運命、恋すべき人に恋する機会がなく、思いも懸けぬ人にその一生を任した運命、実際芳子の当時の心情そのままであつた。須磨の浜で、ゆくりなく受取つた百合ゆりの花の一葉の端書、それがこうした運命になろうとは夢にも思い知らなかつたのである。

雨の森、闇の森、月の森に向つて、芳子はさまざまにその事を思つた。京都の夜汽車、嵯峨さかの月、膳所ぜに遊んだ時には湖水

に夕日が美しく射渡つて、旅館の中庭に、萩はぎが絵のように咲乱れていた。その二日の遊は実に夢のようであつたと思つた。続いてまだその人を恋せぬ前のこと、須磨の海水浴、故郷の山の中の月、病氣にならぬ以前、殊ことにその時の煩悶はんもんを考えると、頬ほおがおのずから赧あかくなつた。

空想から空想、その空想はいつか長い手紙となつて京都に行つた。京都からも殆ど隔日ほとんのように厚い厚い封書が届いた。書いても書いても尽くされぬ二人の情——余りその文通の頻繁ひんばんなのに時雄は芳子の不在を窺うかがつて、監督という口実の下にその良心を抑えて、こつそり机の抽出ひきだしやら文箱ふぼこやらをさがした。捜し出した二三通の男の手紙を走り読みに読んだ。

恋人のするような甘つたるい言葉は到る処に満ちていた。けれど時雄はそれ以上にある秘密を捜し出そうと苦心した。接吻せつぶん

の痕あと、性慾の痕が何処かに顕あらわれておりはせぬか。神聖なる恋以上に二人の間は進歩しておりはせぬか、けれど手紙にも解らぬのは恋のまことの消息であつた。

一カ月は過ぎた。

ところが、ある日、時雄は芳子に宛てた一通の端書を受取つた。英語で書いてある端書であつた。何気なく読むと、一月ほどの生活費は準備して行く、あとは東京で衣食の職業が見附かるかどうかという意味、京都田中としてあつた。時雄は胸とどろを轟かした。平和は一時にして破れた。

晩餐ばんさん後、芳子はその事を問われたのである。

芳子は困つたという風で、「先生、本当に困つて了しまつたんです。田中が東京に出て来ると云うのですもの、私は二度、三度まで止めて遣つたんですけど、何だか、宗教に従事して、虚偽

に生活してることが、今度の動機で、すっかり厭いやになつて了つたとか何とかで、どうしても東京に出て来るツて言うんですよ」

「東京に来て、何をするつもりなんだ？」

「文学を遣りたいと——」

「文学？ 文学ツて、何だ。小説を書こうと言うのか」

「え、そうでしょう……」

「馬鹿な！」

と時雄は一喝かつした。

「本当に困つて了うんですの」

「貴嬢あなたはそんなことを勧めたんじやないか」

「いいえ」と烈しく首を振つて、「私はそんなこと……私は今の場合困るから、せめて同志社だけでも卒業してくれツて、この間初めに申して来た時に達たつて止めて遣つたんですけれど……」

もうすっかり独断でそうして了ったんですッて。今更取かえし  
がつかぬようになって了ったんですッて」

「どうして？」

「神戸の信者で、神戸の教会の爲めに、田中に学資を出してく  
れている神津こうづという人があるのです。その人に、田中が宗教  
は自分には出来ぬから、将来文学で立とうと思う。どうか東京  
に出してくれと言つて遣つたんです。すると大層怒つて、そ  
れならもう構わぬ、勝手にしろと言われて、すっかり支度をし  
てしまつたんですッて、本当に困つて了いますの」

「馬鹿な！」

と言つたが、「今一度留めて遣んなさい。小説で立とうなんて  
思つたッて、とても駄目だ、全く空想だ、空想の極端だ。それ  
に、田中が此方こちに出て来ていては、貴嬢の監督上、私が非常に

困る。貴嬢の世話も出来んようになるから、きび厳しく止めて遣んなさい！」

芳子は愈いよいよ困ったという風で、「止めてはやりませうけれど、手紙が行違ちがいになるかも知れませんか」

「行違ちがい？ それじゃもう来るのか」

時雄は眼を睜みはつた。

「今来た手紙に、もう手紙をよこしてくれても行違ちがいになるからと言いつてよこしたんですから」

「今来た手紙つて、さっきの端書はながの又後に来たのか」

芳子は点頭うなずいた。

「困こつたね。だから若い空想家は駄目だと言うんだ」

平和は再び攪乱かきみださるることとなつた。

一日置いて今夜の六時に新橋に着くという電報があつた。電報を持って、芳子はまごまごしていた。けれど夜ひとり若い女を出して遣る訳に行かぬので、新橋へ迎えに行くことは許さなかつた。

翌日は逢つて達つて諫めてどうしても京都に還らせるようにすると云つて、芳子はその恋人の許を訪うた。その男は停車場前のつるやという旅館はたごやに宿つていたのである。

時雄が社から帰つた時には、まだとても帰るまいと思つた芳子が既にその笑顔を玄関にあらわしていた。聞くと田中は既にこうして出て来た以上、どうしても京都には帰らぬとのことだ。で、芳子は殆ど喧嘩けんかをするまでに争つたが、矢張断だんとして可きか

ぬ。先生を頼りにして出京したのではあるが、そう聞けば、なるほど御尤である。監督上都合の悪いというのもよく解りました。けれど今更帰れませぬから、自分で如何ようにしても自活の道を求めて目的地に進むより他はないとまで言ったそうだ。時雄は不快を感じた。

時雄は一時は勝手にしろと思った。放っておけとも思った。けれど圈内の一員たるかれにどうして全く風馬牛たることを得ようぞ。芳子はその後二三日訪問した形跡もなく、学校の時間には正確に帰って来るが、学校に行くと呼称して恋人の許に寄りませぬかと思うと、胸は疑惑と嫉妬とに燃えた。

時雄は懊悩した。その心は日に幾遍となく変った。ある時は全く犠牲になつて二人の為に尽そうと思つた。ある時はこの一伍一什を国に報じて一挙に破壊して了おうかと思つた。けれ

蒲団  
た。どの何れをも敢てすることの出来ぬのが今の心の状態であつた。

細君が、ふと、時雄に耳語した。

「あなた、二階では、これよ」と針で着物を縫う真似をして、小声で、「きつと……上げるんでしよう。紺緋の書生羽織！ 白い木綿の長い紐も買つてありますよ」

「本当か？」

「え」

と細君は笑つた。

時雄は笑うどころではなかつた。

芳子が今日は先生少し遅くなりますからと顔を赧くして言つた。「彼処に行くのか」と問うと、「いいえ！ 一寸友達の処に

用があつて寄つて来ますから」

その夕暮、時雄は思切つて、芳子の恋人の下宿を訪問した。

「まことに、先生にはよう申訳がありまえんのやけれど……」  
長い演説調の雄弁で、形式的の申訳をした後、田中という中脊ちゆうぜいの、少し肥えた、色の白い男が祈禱きとうをする時のような眼色をして、さも同情を求めると言つた。

時雄は熱していた。「しかし、君、解つたら、そうしたら好いじゃありませんか、僕は君等の将来を思つて言うのです。芳子は僕の弟子でしです。僕の責任として、芳子に廃学させるには忍びん。君が東京にどうしてもいると言ふなら、芳子を国に帰すか、この關係を父母に打明けて許可を乞こうか、二つの中一つを選ばなければならん。君は君の愛する女を君の為に山の中に埋もらせるほどエゴイスチックな人間じゃありませんまい。君は宗教

に従事することが今度の事件の爲めに厭いやになつたと謂いうが、それは一種の考えで、君は忍んで、京都に居りさえすれば、万事円満に、二人の間柄も将来希望があるのですから」

「よう解つております……」

「けれど出来んですか」

「どうも済みませんけど……制服も帽子も売つてしもうたで、今更帰るにも帰れまえんという次第で……」

「それじゃ芳子を国に帰すですか」

かれは黙つている。

「国に言つて遣りましようか」

矢張黙つていた。

「私の東京に参りましたのは、そういうことには寧むじろ關係しない積つもりでおます。別段こちらに居りましても、二人の間にはどう

という……」

「それは君はそう言うでしょう。けれど、それでは私は監督は出来ん。恋はいつわくで惑溺するかも解らん」

「私はそないなことは無いつもりですけどナ」

「誓い得るですか」

「静かに、勉強して行かれさえすれアナ、そないなことありませんけどナ」

「だから困るのです」

こういう会話——要領を得ない会話を繰返して長く相對した。

時雄は将来の希望という点、男子の犠牲という点、事件の進行という点からいろいろさまざまに帰国を勧めた。時雄の眼に映じた田中秀夫は、想像したような一箇秀麗な丈夫じょうふでもなく天才肌の人とも見えなかつた。麴町三番町通の安旅人宿やすはたご、三方壁で

しきられた暑い室に初めて相對した時、先まずかれの身に迫つたのは、基督キリスト教に養われた、いやに取澄ました、年に似合わぬ老成な、厭な不愉快な態度であつた。京都なまり訛の言葉、色の白い顔、やさしいところはいくらかはあるが、多い青年の中からこうした男を特に選んだ芳子の氣が知れなかつた。殊に時雄が最も厭に感じたのは、天真流露という率直なところが微塵みじんもなく、自己の罪惡にも弱点にも種々いろいろの理由を強しいてつけて、これを弁解しようとする形式的態度であつた。とは言え、実を言えば、時雄の激しい頭腦あたまには、これがすぐ直覺的に明かに映つたと云うではなく、座敷の隅すみに置かれた小さい旅靴たびかばんや憐れあわにもしておたれた白地の浴衣ゆかたなどを見ると、青年空想の昔が思い出されて、こうした恋の爲め、煩悶はんもんもし、懊惱おんぼうもしているかと思つて、憐憫れんぴんの情も起らぬではなかつた。

この暑い一室に相對して、あぐら 趺坐をもちかかず、二人はすくな 尠くとも一時間以上語つた。話は遂に要領を得なかつた。「先ず今一度考へ直して見給え」くらいが最後で、時雄は別れて帰途に就いた。

何だか馬鹿らしいような気がした。愚なる行為をしたように感じられて、自らその身をちようしよく 嘲笑した。心にもないお世辞をもいい、自分の胸の底の秘密をおほ 蔽う為めには、二人の恋の温情なる保護者となろうとまで言つたことを思い出した。安ほんやく 飜訳の仕事を周旋してもら 貰う為め、某氏に紹介の労を執ろうと言つたことをも思い出した。そして自分ながら自分の意気地なく好人物なのののし を罵つた。

時雄は幾度か考えた。寧むしろ国に報知して遣ろうか、と。けれどそれを報知するに、どういう態度を以てしようかというのが大問題であつた。二人の恋のかぎ 關鍵を自ら握っていると信ずるだ

けそれだけ時雄は責任を重く感じた。その身の不当の嫉妬、不当の恋情の爲めに、その愛する女の熱烈なる恋を犠牲にするには忍びぬと共に、自ら言った「温情なる保護者」として、道徳家の如く身を処するにも堪えなかつた。また一方にはこの事が国に知れて芳子が父母の爲めに伴われて帰国するようになるのを恐れた。

芳子が時雄の書齋に来て、頭を垂れ、声を低うして、その希望を述べたのはその翌日の夜であつた。如何いかに説いても男は帰らぬ。さりとて国へ報知すれば、父母の許さぬのは知れたこと、時宜じぎに由よれば忽たちまち迎むかひに来ぬとも限らぬ。男も折角ああして出て来たことでもあり二人の間も世の中の男女の恋のように浅く思ひ浅く恋した訳でもないから、決して汚れた行為などはなく、惑溺むせするようなことは誓つて為なさぬ。文学は難むずかしい道、小説

を書いて一家を成そうとするのは田中のようなものには出来ぬ  
かも知れねど、同じく将来を進むなら、共に好む道に携わりた  
い。どうか暫くしばしばこのままにして東京に置いてくれとの頼み。時  
雄はこの余儀なき頼みをすげなく却けるしりぞことは出来なかつた。  
時雄は京都嵯峨さかに於ける女の行為にその節操を疑つてはいるが、  
一方には又その弁解をも信じて、この若い二人の間にはまだそ  
んなことはあるまいと思つていた。自分の青年の経験に照らし  
てみても、神聖なる靈の恋は成立つても肉の恋は決してそう容  
易に実行されるものではない。で、時雄は惑溺せぬものならば、  
暫くこのままにしておいて好いと言つて、そして縷々るるとして靈  
の恋愛、肉の恋愛、恋愛と人生との関係、教育ある新しい女の当  
に守るべきことなどに就いて、切実にかつ真摯しんしに教訓した。古  
人が女子の節操を誡めたいましのは社会道德の制裁よりは、寧ろ女子

の独立を保護する為であるということ、一度肉を男子に許せば女子の自由が全く破れるということ、西洋の女子はよくこの間の消息を解しているから、男女交際をして不都合がないということ、日本の新しい婦人も是非ともそうならなければならぬということなどおも主なる教訓の題目であつたが、殊に新派の女子と  
いうことに就いて痛切に語つた。

芳子はうっむ低頭おもいてきいていた。

時雄は興に乗じて、

「そして一体、どうして生活しようというのです？」

「少しは準備もして来たんでしよう、一月位は好いでしようけれど……」

「何かうま旨い口でもあると好いけれど」と時雄は言つた。

「実は先生におすが御縫り申して、誰も知ってるものがないのに出て

参りましたのですから、大層失望しましたのですけれど」

「だッて余り突飛だ。一昨日逢つてもそう思つたが、どうもあれでも困るね」

と時雄は笑つた。

「どうか又御心配下さるよう……この上御心配かけては申訳がありませんけれど」と芳子は縋るようにして顔を赧めた。

「心配せん方が好い、どうかなるよ」

芳子が出て行つた後、時雄は急に険けわしい難かしい顔に成つた。

「自分に……自分に、この恋の世話が出来るだろうか」と独りひとで

胸に反問した。「若い鳥は若い鳥でなくては駄目だ。自分等も

うこの若い鳥を引く美しい羽を持っていない」こう思うと、言

うに言われぬ寂しさがひしと胸を襲つた。「妻と子——家庭の快

楽だと人は言うが、それに何の意味がある。子供の為に生存

している妻は生存の意味があるうが、妻を子に奪われ、子を妻に奪われた夫はどうして寂<sup>せき</sup>寞<sup>ぼく</sup>たらざるを得るか」時雄はじつと洋<sup>ランプ</sup>燈を見た。

机の上にはモウパッサンの「死よりも強し」が開かれてあつた。

二三日経<sup>た</sup>つて後、時雄は例刻に社から帰つて火鉢<sup>ひばち</sup>の前に坐ると、細君が小声で、

「今日来てよ」

「誰が」

「二階の……そら芳子さんの好きな人」

細君は笑つた。

「そうか……」

「今日一時頃、御免なさいと玄関に來た人があるですから、私が出て見ると、顔の丸い、かすり緋の羽織を着た、しろしま白縞の袴を穿いた書生さんが居るじゃありませんか。また、原稿でも持って來た書生さんかと思つたら、こちら横山さんは此方においでですかと言うじゃありませんか。はて、不思議だと思つたけれど、名を聞きますと、田中……。はア、それでその人だナと思つたんですよ。厭な人ねえ、あんな人を、あんな書生さんを恋人にしないたツて、いくらも好いのがあつたでしょうに。芳子さんは余程物好きね。あれじゃとても望みはありませんよ」

「それでどうした？」

「芳子さんはうれ嬉しいんでしようけど、何だかきま極りが悪そうでしたよ。私がお茶を持って行つて上げると、芳子さんは机の前に坐つている。その前にその人が居て、今まで何か話していたの

を急に止して黙ってしまった。私は変だからすぐ下りて来たですがね、……何だか変ね、……今の若い人はよくああいうことが出来てね、私のその頃には男に見られるのすら恥かしくって恥かしくって為方しかたがなかったものなのですのに……」

「時代が違うからナ」

「いくら時代が違っても、余り新派過ぎると思ひましたよ。墮落書生と同じですからね。それやうわべが似ているだけで、心はそんなことはないでしょうけれど、何だか変ですよ」

「そんなことはどうでも好い。それでどうした？」

「お鶴（下女）が行つて上げると言うのに、好いと言つて、御自分で出かけて、餅菓子もちがしと焼芋やきいもを買つて来て、御馳走ごちそうしてよ。……お鶴も笑つていましたよ。お湯をさしに上ると、二人でお旨いしそうにおさつを食べているところでしたッて……」

時雄も笑わざるを得なかつた。

細君は猶語り続いた。なお「そして随分長く高い声で話してしましたよ。議論みたいなことも言つて、芳子さんもなかなか負けな様子でした」

「そしていつ帰つた？」

「もう少し以前さつき」

「芳子は居るか」

「いいえ、路みちが分からないから、一緒に其処そこまで送つて行つて来るツて出懸でかけて行つたんですよ」

時雄は顔を曇らせた。

夕飯を食つていると、裏口から芳子が帰つて来た。急いで走つて来たと覺しく、せいせい息を切っている。

「何処どこまで行らした？」

と細君が問うと、

「神楽坂まで」と答えたが、いつもする「おかえりなさいまし」を時雄に向つて言つて、そのままばたばたと二階へ上つた。すぐ下りて来るかと思うに、なかなか下りて来ない。「芳子さん、芳子さん」と三度ほど細君が呼ぶと、「はアーい」という長い返事が聞えて、矢張り下りて来ない。お鶴が迎いに行つて漸く二階を下りて来たが、準備した夕飯の膳を他所よそに、柱に近く、斜はすに坐つた。

「御飯は？」

「もう食べたくないの、腹おなかが一杯で」

「余りおさつを召上つた故せいでしよう」

「あら、まア、酷ひどい奥さん。いいわ、奥さん」

と睨にらむ真ま似ねをする。

細君は笑つて、

「芳子さん、何だか変ね」

「何故？」と長く引張る。

「何故でも無いわ」

「いいことよ、奥さん」

と又睨んだ。

時雄は黙つてこの嬌態きょうたいに対していた。胸の騒ぐのは無論である。不快の情はひしと押し寄せて来た。芳子はちらと時雄の顔を覗うかがつたが、その不機嫌ふきげんなのが一目で解つた。で、すぐ態度を改めて、

「先生、今日田中が参りましたね」

「そうだってね」

「お目にかかつてお礼を申上げなければならんですけれども、

又改めて上がりますからッて……よろしく申上げて……」

「そうか」

と言ったが、そのままふいと立って書斎に入つて了つた。

その恋人が東京に居ては、仮令たとい自分が芳子をその二階に置いて監督しても、時雄は心を安んずる暇はなかつた。二人の相違うことを妨げることは絶対に不可能である。手紙は無論差留めることは出来ぬし、「今日ちよつと田中に寄つて参りますから、一時間遅くなります」と公然と断つて行くのをどうこう言う訳には行かなかつた。またその男が訪問して来るのを非常に不快に思うけれど、今更それを謝絶することも出来なかつた。時雄はいつの間にか、この二人からその恋に対しての「温情の保護者」として認められて了つた。

時雄は常に苛々<sup>いらいら</sup>していた。書かなければならぬ原稿が幾種もある。書肆<sup>しよし</sup>からも催促される。金も欲<sup>ほ</sup>しい。けれどどうしても筆を執つて文を綴<sup>つづ</sup>るような沈着<sup>おちつ</sup>いた心の状態にはなれなかつた。強<sup>し</sup>いて試みてみるものがあつても、考<sup>ましま</sup>が纏<sup>まと</sup>らない。本を読んでも二頁<sup>ページ</sup>も続けて読む気になれない。二人の恋の温かさを見る度に、胸を燃<sup>もや</sup>して、罪もない細君に当り散らして酒を飲んだ。晚餐<sup>ばんさん</sup>の菜が気に入らぬと云つて、御膳<sup>おぜん</sup>を蹴<sup>け</sup>飛ばした。夜は十二時過に酔つて帰つて来ることもあつた。芳子はこの乱暴な不調子な時雄の行為に尠<sup>すく</sup>なからず心を痛めて、「私がいろいろ御心配を懸けるもんですからね、私が悪いんですよ」と詫<sup>わ</sup>びるように細君に言つた。芳子はなるたけ手紙の往復を人に見せぬようにし、訪問も三度に一度は学校を休んでこっそり行くようにした。時雄はそれに気が附いて一層懊惱の度を増した。

野は秋も暮れて木枯こがらしの風が立つた。裏の森の銀杏樹いちょうも黄葉もみぢして夕の空を美しく彩いろどった。垣根道には反そりかえつた落葉らくえつががさがさと転ころがって行く。鴟もずの鳴音なきごえがけたたましく聞える。若い二人の恋が愈いよいよ人目に余るようになったのはこの頃であつた。時雄は監督上見るに見かねて、芳子を説ときすす勧め、この一伍一什いちぶしじゅうを故郷の父母に報はせしめた。そして時雄もこの恋に關しての長い手紙を芳子の父に寄せた。この場合にも時雄は芳子の感謝の情を十分に贏かち得るように勉つとめた。時雄は心を欺ういて、——悲壯な犠牲と称して、この「恋の温情なる保護者」となつた。

備中びつちゅうの山中から数通の手紙が来た。

その翌年の一月には、時雄は地理の用事で、上武の境なる利根とね河畔かはんに出張していた。彼は昨年の年末からこの地に来ているので、家のこと——芳子いかんのことが殊ことに心配になる。さりとて公務を如何いかにともすることが出来なかつた。正月になつて二日にちよつと帰京したが、その時は次男が齒を病んで、妻と芳子とが頻しきりにそれを介抱していた。妻に聞くと、芳子の恋は更に惑溺わくどきの度を加えた様子。大晦日おおみそかの晩に、田中が生活のたつきを得ず、下宿に帰ることも出来ずに、終夜運転の電車に一夜を過したといふこと、余り頻繁ひんぱんに二人が往来するので、それをそれとなしに注意して芳子と口争いをしたといふこと、その他種々のことを聞いた。困つたことだと思つた。一晚泊つて再び利根の河畔に戻つた。

今は五日の夜であつた。茫ぼうとした空に月が暈かきを帯びて、その

光が川の中央にきらきらと金を砕いていた。時雄は机の上に一通の封書を展ひらいて、深くその事を考えていた。その手紙は今少し前、旅館の下女が置いて行つた芳子の筆である。

先生、

まことに、申訳が御座いませぬ。先生の同情ある御恩は決して一生経たつても忘るることではなく、今もそのお心を思うと、涙こぼが滴たるるのです。

父母はあの通りです。先生があのように仰おつしやつて下さつても、旧風むかしふうの頑固かたくなで、私共の心を汲くんでくれようとも致しませぬ、泣いて訴えましたけれど、許してくれませぬ。母の手紙を見れば泣かずにはおられませぬけれど、少しは私の心も汲んでくれてもいいと思います。恋とはこう苦しいものかと今つくづく思い当りました。先生、私は決心致し

ました。聖書にも女は親に離れて夫に従うと御座います通り、私は田中に従おうと存じます。

田中は未だに生活のたつきを得ませず、準備した金は既に尽き、昨年の暮れは、うらぶれの悲しい生活を送ったので御座います。私はもう見ているに忍びません。国からの補助を受けませんでも、私等は私等二人で出来るまでこの世に生きてみようと思えます。先生に御心配を懸けるのは、まことに済みません。監督上、御心配なされるのも御尤もです。けれど折角先生があのように私等のために国の父母をお説き下さったにも係らず、父母は唯無意味に怒ってばかりいて、取合ってくれませんのは、余りと申せば無慈悲です、勘当されても為方が御座いませぬ。墮落々と申して、殆ど齒せぬばかりに申しておりますが、私達の恋はそんな

不真面目なもので御座いませうか。それに、家の門地々々と申しますが、私は恋を父母の都合によつて致すような旧式の女でないことは先生もお許し下さるでしょう。

先生、

私は決心致しました。昨日上野図書館で女の見習生が入用だという広告がありましたから、応じてみようと思ひます。二人して一生懸命に働きましたら、まさかに餓えるようなことも御座いますまい。先生のお家にこうして居ますればこそ、先生にも奥様にも御心配を懸けて済まぬので御座います。どうか先生、私の決心をお許し下さい。

芳子

先生 おんもとへ

恋の力は遂に二人を深い惑溺わくできの淵ふちに沈めたのである。時雄はもうこうしてはおかれぬと思つた。時雄が芳子の歡心を得る為めに取つた「温情の保護者」としての態度を考えた。備中の父親に寄せた手紙、その手紙には、極力二人の恋を庇保ひほして、どうしてもこの恋を許して貰もらわねばならぬという主旨であつた。時雄は父母の到底これを承知せぬことを知つていた。寧ろ父母の極力反対することを希望してゐた。父母は果して極力反対して来た。言うことを聞かぬなら勘当するとまで言つて来た。二人はまさに受くべき恋の報酬を受けた。時雄は芳子の為めに飽あまで弁明し、汚れた目的の為めに行われたる恋でないことを言い、父母の中一人、是非出京してこの問題を解決して貰もらいたいと言ひ送つた。けれど故郷の父母は、監督なる時雄がそういう主張であるのと、到底その口から許可することが出来ぬのとで、

上京しても無駄であると云つて出て来なかつた。

時雄は今、芳子の手紙に対して考えた。

二人の状態は最早一刻も猶予すべからざるものとなつている。時雄の監督を離れて二人一緒に暮したいという大胆な言葉、その言葉の中には警戒すべき分子の多いのを思つた。いや、既に一步を進めているかも知れぬと思つた。又一面にはこれほどそのために尽力しているのに、その好意を無にして、こういう決心をするとは義理知らず、情知らず、勝手にするが好いとまで激した。

時雄は胸の轟とどろきを静める為め、月朧おぼろなる利根川の堤の上を散歩した。月が暈かさを帯びた夜は冬ながらやや暖かく、土手下の家々の窓には平和な燈火が静かに輝いていた。川の上には薄い靄もやが懸つて、おりおり通る船の艫うづの音がギイと聞える。下流でおー

いと渡しを呼ぶものがある。舟橋を渡る車の音がとどろに響いてそして又一時静かになる。時雄は土手を歩きながら種々のことを考えた。芳子のことよりは一層痛切に自己の家庭のさびしさということが胸を往来した。三十五六歳の男女の最も味うべき生活の苦痛、事業に対する煩惱、性欲より起る不満足等が凄じい力でその胸を圧迫した。芳子のかれの為めに平凡なる生活の花でもあり又糧でもあつた。芳子の美しい力に由つて、荒野の如き胸に花咲き、錆び果てた鐘は再び鳴ろうとした。芳子の為めに、復活の活気は新しく鼓吹された。であるのに再び寂寞荒涼たる以前の平凡なる生活にかえらなければならぬとは……。不平よりも、嫉妬よりも、熱い熱い涙がかれの頬を伝つた。

かれは真面目に芳子の恋とその一生とを考えた。二人同棲して後の倦怠、疲労、冷酷を自己の経験に照らしてみた。そして

一たび男子に身を任せて後の女子の境遇の憐むべきを思い遣つた。自然の最奥に秘める暗黒なる力に対する厭世の情は今彼の胸を簇々として襲つた。

真面目なる解決を施さなければならぬという気になつた。今までの自分の行為の甚だ不自然で不真面目であるのに思いついた。時雄はその夜、備中の山中にある芳子の父母に寄する手紙を熱心に書いた。芳子の手紙をその中に巻込んで、二人の近況を詳しく記し、最後に、

父たる貴下と師たる小生と当事者たる二人と相對して、此の問題を真面目に議すべき時節到来せりと存候、貴下は父としての主張あるべく、芳子は芳子としての自由あるべく、小生また師としての意見有之候、御多忙の際には有之候えども、是非々々御出京下され度、幾重にも希望仕候。

と書いて筆を結んだ。封筒に収めて備中国新見町横山兵蔵様にいみまちと書いて、傍に置いて、じつとそれを見入った。この一通が運命の手だと思つた。思いきつて婢おんなを呼んで渡した。

一日二日、時雄はその手紙の備中の山中に運ばれて行くさまを想像した。四面山で囲まれた小さな田舎町いなかまち、その中央にある大きな白壁造、そこに郵便脚夫が配達すると、店に居た男がそれを奥へ持つて行く。丈たけの高い、髯ひげのある主人がそれを読む——運命の力は一刻毎に迫つて来た。

## 八

十日に時雄は東京に帰つた。

その翌日、備中から返事があつて、二三日の中に父親が出発

すると報じて来た。

芳子も田中も今の際、寧ろ<sup>むし</sup>それを希望しているらしく、別にこれと云つて驚いた様子も無かつた。

父親が東京に着いて、先<sup>ま</sup>ず京橋に宿を取つて、牛込の時雄の宅を訪問したのは十六日の午前十一時頃であつた。丁度日曜で、時雄は宅に居た。父親はフロックコートを着て、中高帽を冠<sup>かぶ</sup>つて、長途の旅行に疲れたという風であつた。

芳子はその日医師へ行つていた。三日程前から風邪<sup>かぜ</sup>を引いて、熱が少しあつた。頭痛がすると言つていた。間もなく帰つて来たが、裏口から何の気なしに入ると、細君が、「芳子さん、芳子さん、大変よ、お父さんが来てよ」

「お父さん」

と芳子もさすがにはつとした。

そのまま二階に上つたが下りて来ない。

奥で、「芳子は？」と呼ぶので、細君が下から呼んでみたが返事がない。登つて行つて見ると、芳子は机の上に打伏うつぶしている。

「芳子さん」

返事が無い。

傍に行つて又呼ぶと、芳子は青い神経性の顔を擡もたげた。

「奥で呼んでいますよ」

「でもね、奥さん、私はどうして父に逢あわれるでしょう」

泣いているのだ。

「だつて、父様に久し振じゃありませんか。どうせ逢わないわけには行かんのですもの。何アにそんな心配をすることはありませんよ、大丈夫ですよ」

「だつて、奥さん」

「本当に大丈夫ですから、しつかりなさいよ、よくあなたの心を父様にお話しなさいよ。本当に大丈夫ですよ」

芳子は遂に父親の前に出た。鬚ひげ多く、威厳のある中に何処どことなく優しいところのある懐なつかしい顔を見ると、芳子は涙の漲みなぎるのを禁とどめ得なかつた。旧式な頑固がんこな爺おやじ、若いものの心などの解らぬ爺、それでもこの父は優しい父であつた。母親は万事に気が附いて、よく面倒を見てくれたけれど、何故か芳子には母よりもこの父の方が好かつた。その身の今の窮迫を訴え、泣いてこの恋の真面目なのを訴えたら父親もよもや動かされぬことはあるまいと思つた。

「芳子、暫しばらくじゃつたのう……体は丈夫かの？」

「お父さま……」芳子は後を言い得なかつた。

「今度来ます時に……」と父親は傍に坐つている時雄に語つた。

「佐野と御殿場でしたかナ、汽車に故障がありましたナ、二時間ほど待ちました。機関が破裂しましてナ」

「それは……」

「全速力で進行している中に、すさま凄じい音がしたと思ひましたけえ、汽車がおびただ夥しく傾斜してだらだらと逆行しましてナ、何事かと思ひました。機関が破裂して火夫が二人とか即死した……」

「それは危険でしたナ」

「沼津から機関車を持つて来てつけるまで二時間も待ちましたけえ、その間もナ、思ひまして……これの為にこうして東京に来てゐる途中、もしもの事があつたら、芳（と今度は娘の方を見て）お前も兄弟に申訳が無かろうと思つたじゃわ」

芳子は頭を垂れて黙つていた。

「それは危険でした。それでも別にお怪我もなくつて結構でし

た」

「え、まア」

父親と時雄は暫くその機関破裂のことに就いて語り合つた。  
不<sup>ふ</sup>凶<sup>と</sup>、芳子は、

「お父様、家では皆な変ることは御座いません？」

「うむ、皆な達者じゃ」

「母さんも……」

「うむ、今度も私が忙しいけえナ、母に来て貰うように言うて  
じゃつたが、矢張、私の方が好いじやろうと思つて……」

「兄さんも御達者？」

「うむ、あれもこの頃は少し落附いている」

かれこれする中に、午飯<sup>ひるめし</sup>の膳が出た。芳子は自分の室に戻つた。食事を終つて、茶を飲みながら、時雄は前からのその問題

を語り続<sup>つ</sup>いだ。

「で、貴方<sup>あなた</sup>はどうしても不賛成？」

「賛成しようにもしまいいにも、まだ問題になりおりませんけえ。今、仮に許して、二人一緒にするに致しても、男が二十二で、同志社の三年生では……」

「それは、そうですが、人物を御覧の上、将来の約束でも……」  
「いや、約束などと、そんなことは致しますまい。私は人物を見たわけでありませんけえ、よく知りませんが、女学生の  
上京の途次を要して途中に泊らせたり、年来の恩ある神戸教会  
の恩人を一朝にして捨て去つたりするような男ですけえ、とて  
も話にはならぬと思えますじゃ。この間、芳から母へよこした  
手紙に、その男が苦しんでおるじゃで、どうか御察し下すつて、  
私の学費を少くしても好いから、早稲田<sup>わせだ</sup>に通う位の金を出して

くれと書いてありましたげな、何かそういう計画で芳がだまされておるんではないですかな」

「そんなことは無いでしょうと思うのですが……」

「どうも怪しいことがあるです。芳子と約束が出来て、すぐ宗教が厭いやになつて文学が好きになつたと言うのも可笑おかしし、その後をすぐ追つて出て来て、貴方などの御説論も聞かずに、衣食に苦しんでまでもこの東京に居るなども意味がありそうですわい」

「それは恋の惑溺であるかも知れませんが善意に解釈することも出来ませんが」

「それにしても許可するのせぬのとは問題になりませんけえ、結婚の約束は大きなことでして……。それにはその者の身分も調べて、此方こつちの身分との釣合も考えなければなりませんし、血

統を調べなければなりません。それに人物が第一です。貴方の御覧になるところでは、秀才だとか仰おつしゃつてですが……」

「いや、そう言うわけでも無かつたです」

「一体、人物はどういう……」

「それは却かえつて母さんなどが御存じだと言うことですが」

「何アに、須磨すまの日曜学校で一二度会つたことがある位、妻もよく知らんそうです。何でも神戸では多少秀才とか何とか言われた男で、芳は女学院に居る頃から知つておるのでしようがナ。説教や祈祷きとうなどを遣やらせると、大人も及ばぬような巧いことを遣りおつたそうですけえ」

「それで話が演説調になるのだ、形式的になるのだ、あの厭な上目を使うのは、祈祷をする時の表情だ」と時雄は心の中に合点がてんした。あの厭な表情で若い女を迷わせるのだなと続いて思つて

厭な気がした。

「それにしても、結局はどうしましょう？　芳子さんを伴つれてお帰りになりますか」

「されば……なるだけは連れて帰りたいかないと思いますがナ。村に娘を伴つれて突然帰ると、どうも際きわ立つて面白くありません。私も妻も種々村の慈善事業や名誉職などを遣つつておりますけえ、今度のことなどがぱつとしますと、非常に困る場合もあります……で、私は、貴方おつの仰おつしやる通り、出来得べくば、男を元の京都に帰して、此処ここ一二年、娘は猶なおお世話になりたいと存ぞんじておりますじゃが……」

「それが好いですな」

と時雄は言った。

二人の間柄に就いての談話も一二あった。時雄は京都嗟さ峨がの

事情、その以後の経過を話し、二人の間には神聖の靈の恋のみ成立つていて、汚きたない関係は無いであろうと言つた。父親はそれを聴いて點頭うなずきはしたが、「でもまあ、その方の関係もあるものとして見なければなりませんまい」と言つた。

父親の胸には今更娘に就いての悔恨の情が多かつた。田舎いなかもこの虚栄心の為めに神戸女学院のような、ハイカラな学校に入れて、その寄宿舎生活を行わせたことや、娘の切なる希望を容いれて小説を学ぶべく東京に出したことや、多病の為に言うがままにして余り検束を加えなかつたことや、いろいろなことが簇々むらむらと胸に浮んだ。

一時間後にはわざわざ迎いに遣つた田中がこの室に来ていた。芳子もその傍そばに庇髪ひさがみを俛たれて談話を聞いていた。父親の眼に映じた田中は元より氣に入つた人物ではなかつた。その白縞しろしまの袴はかま

を着け、紺がすりの羽織を着た書生姿は、輕蔑けいべつの念と憎惡ぞうおの念とをその胸みなぎに漲みなぎらしめた。その所有物を奪つた憎むべき男という感は、曾かつて時雄がその下宿でこの男を見た時の感と甚だよく似ていた。

田中は袴ひだの襷ひだを正して、しゃんと坐つたまま、多く二尺先位の畳をのみ見ていた。服従という態度よりも反抗という態度が歴々ありありとしていた。どうも少し固くなり過ぎて、芳子を自分の自由にする或る権利を持つていふ風に見えていた。

談話は真面目まじめにかつ烈しかった。父親はその破廉恥はれんちを敢あえて正面から責めはしないが、おりおり苦にがい皮肉をその言葉の中おもに交えた。初めは時雄が口を切つたが、中頃から重おもに父親と田中とが語つた。父親は県會議員をした人だけあつて、言葉の抑揚頓挫よくやうとんざが中々巧みであつた。演説に慣れた田中も時々沈黙させられた。

二人の恋の許可不許可も問題に上ったが、それは今研究すべき題目でないとして却けられ、当面の京都帰還問題が論ぜられた。

恋する二人——殊に男に取っては、この分離は甚だ辛いしかなかった。男は宗教的資格を全く失つたということ、帰るべく家をも国をも持たぬということ、二三月来飄零の結果漸く東京に前途の光明を認め始めたのに、それを捨てて去るに忍びぬということなどを楯として、頻りに帰国の不可能を主張した。

父親は懇々として説いた。

「今更京都に帰れないという、それは帰れないに違いない。けれど今の場合である。愛する女子ならその女子の為に犠牲になれぬということはあるまいじゃ。京都に帰れないから田舎に帰る。帰れば自分の目的が達せられぬというが、其処を言うのじゃ。其処を犠牲になつても好かろうと言うのじゃ」

田中は黙して下を向いた。容易に諾だくしそうにも無い。

先程から黙はげまつて聞いていた時雄は、男が余りに頑固なのに、急に声を励はげまして、「君、僕は先程から聞いていたが、あれほどに言うお父さんの言葉が解らんですか。お父さんは、君の罪をも問わず、破廉恥をも問わず、将来もし縁があつたら、この恋愛を承諾せぬではない。君もまだ年が若い、芳子さんも今修業最中である。だから二人は今暫くこの恋愛問題を未解決うちの中うちにそのままにしておいて、そしてその行末を見ようと言うのが解らんですか。今の場合、二人はどうしても一緒には置かれぬ。何方どっちかこの東京を去らなくつてはならん。この東京を去るということに就いては、君が先ず去るのが至当だ。何故かと謂いえば、君は芳子の後を追うて来たのだから」

「よう解つております」と田中は答えた。「私が万事悪いのでご

ございますから、私が一番に去らなければなりません。先生は今、この恋愛を承諾して下されぬではないと仰おつしゃったが、お父様の先程の御言葉では、まだ満足致されぬような訳でして……」

「どういう意味です」  
と時雄は反問した。

「本当に約束せぬというのが不満だと言うのですじやろう」と、父親は言葉を入れて、「けれど、これは先程もよく話した筈はずじゃけえ。今の場合、許可、不許可という事は出来ぬじゃ。独立することも出来ぬ修業中の身で、二人一緒にこの世の中に立って行こうと言いやるは、どうも不信用じゃ。だから私は今三四年はお互に勉強するが好いじゃと思う。真面目ならば、こうまで言つた話は解らんけりやならん。私が一時を瞞まん着して、芳を他に嫁よそけるとか言うのやなら、それは不満足じやろう。けれど私は神

に誓つて言う、先生を前に置いて言う、三年は芳を私から進んで嫁にやるようなことはせんじや。人の世はエホバの思召次第、罪の多い人間はその力ある審判を待つより他に為方が無いけえ、私は芳は君に進ずるとまでは言うことは出来ん。今の心が許さんけえ、今度のことは、神の思召に適つていないと思うけえ。三年経つて、神の思召に適うかどうか、それは今から予言は出来んが、君の心が、真実真面目で誠実であつたなら、必ず神の思召に適うことと思うじや」

「あれほどお父さんが解つていらつしやる」と時雄は父親の言葉を受けて、「三年、君が為めに待つ。君を信用するに足りる三年の時日を君に与えると言われたのは、実にこの上ない恩恵でしよう。人の娘を誘惑するような奴には真面目に話をする必要がないといつて、このまま芳子をつれて帰られても、君は一言

も恨むせきはないので、三年待とう、君の真心の見えるまでは、芳子を他に嫁けるようなことはすまいと言う。実に恩恵ある言葉だ。許可すると言ったより一層恩義が深い。君はこれが解らんですか」

田中は低頭うつむいて顔をしかめると思ったら、涙がはらはらとその頬ほおを伝った。

一座は水を打ったように静かになった。

田中は溢あふれ出いざる涙を手の拳こぶしで拭ぬぐった。時雄は今ぞ時と、「どうです、返事を為したまへ給え」

「私などはどうなつても好うおます。田舎に埋れても構わんどす！」

また涙を拭った。

「それはいかん。そう反抗的に言つたつて為方がない。腹の

底を打明けて、互に不満のないようにしようとする為めのこの会合です。君は達たつて、田舎に帰るのが厭いやだとならば、芳子を国に帰すばかりです」

「二人一緒に東京に居ることは出来んですか？」

「それは出来ん。監督上出来ん。二人の将来の為めにも出来ん」  
「それでは田舎に埋れてもようおます！」

「いいえ、私が帰ります」と芳子も涙に声を震わして、「私は女……女です……貴方さえ成功して下されば、私は田舎に埋れても構やしません、私が帰ります」

一座はまた沈黙に落ちた。

暫くしてから、時雄は調子を改めて、

「それにしても、君はどうして京都に帰れんです。神戸の恩人に一伍いちぶしじゅう一什を話して、今までの不心得を謝して、同志社に戻つ

たら好いじゃありませんか。芳子さんが文学志願だから、君も文学家にならんければならんというようなことはない。宗教家として、神学者として、牧師として大おおに立つたなら好いでしよう」

「宗教家にはもうとてもようなりまへん。人に対むかつて教を説くような豪えらい人間ではないでおますで。……それに、残念ですのは、三月の間苦勞くろうしまして、実は漸ようやくある親友の世話で、衣食の道が開けましたで、……田舎に埋れるには忍びまへんで」

三人は猶なほ語なつた。話は遂に一小段落を告げた。田中は今夜親友に相談して、明日か明後日までに確か乎つこたる返事を齎もたらそうと言いつて、一先ひとず帰まつた。時計はもう午後四時、冬の日は暮近しく、今まで室の一隅に照あつていた日影もいつか消えて了しまつた。

一室は父親と時雄の二人になった。

「どうも煮えきらない男ですわい」と父親はそれとなく言った。「どうも形式的で、甚だ要領を得んです。もう少し打明けて、ざつくばらんに話してくれると好いですけれど……」

「どうも中国の人間はそうは行かんですけえ、人物が小さくつて、小細工で、すぐ人の股またを潜くぐろうとするですわい。関東から東北の人はまるで違うですがナア。悪いのは悪い、好いのは好いと、真情を吐露して了うけえ、好いですけどもナ。どうもいかん。小細工で、小理窟こりくつで、めそめそ泣きおつた……」

「どうもそういうところがありますナ」

「見ていさつしやい、明日きつと快諾しやあせんけえ、何のかのと理窟をつけて、帰るまいとするけえ」

時雄の胸に、ふと二人の關係に就いての疑惑が起つた。男の

烈しい主張と芳子を己おのが所有とする権利があるような態度とは、時雄にこの疑惑を起さしむるの動機となつたのである。

「で、二人の間の関係をどう御観察なすつたです」

時雄は父親に問うた。

「そうですね。関係があると思わんけりやなりますまい」

「今の際、確かめておく必要があると思うですが、芳子さんに、嵯峨行さがゆきの弁解をさせましょうか。今度の恋は嵯峨行の後に始めて感じたことだと言うてましたから、その証拠になる手紙があるでしょうから」

「まア、其処までせんでも……」

父親は関係を信じつつもその事実となるのを恐れるらしい。

運悪く其処に芳子は茶を運んで来た。

時雄は呼留めて、その証拠になる手紙があるだろう、その身

の潔白を証する為めに、その前後の手紙を見せ給えと迫った。

これを聞いた芳子の顔は俄かに赧にわくなつた。さも困つたといふ風が歴々ありありとして顔と態度とに顕あらわれた。

「あの頃の手紙はこの間皆な焼いて了いましたから」その声は低かつた。

「焼いた？」

「ええ」

芳子は顔を俛たれた。

「焼いた？ そんなことは無いでしょう」

芳子の顔は愈々いよいよあか赧あかくなつた。時雄は激さざるを得なかつた。

事實は恐しい力でかれの胸を刺した。

時雄は立つて厠かわやに行つた。胸は苛々いらいらして、頭脳あたまは眩惑げんわくするように感じた。欺かれたという念が烈しく心頭を衝ついて起つた。

廁を出ると、其処に——障子の外に、芳子はおどおどした様子で立っている。

「先生——本当に、私は焼いて了つたのですから」

「うそをお言いなさい」と、時雄は叱る（しか）ように言つて、障子を烈しく閉めて室内に入つた。

## 九

父親は夕飯の馳走（ちそう）になつて旅宿に帰つた。時雄のその夜の煩悶（はんもん）は非常であつた。欺かれたと思つと、業（ごう）が煮えて為方がない。否、芳子の霊と肉——その全部を一書生に奪われながら、とにかくその恋に就いて真面目（まじめ）に尽したかと思つと腹が立つ。その位なら、——あの男に身を任せていた位なら、何もその処女の

節操を尊ぶには当らなかつた。自分も大胆に手を出して、性慾の満足を買えば好かつた。こう思うと、今まで上天の境ききょうに置いた美しい芳子は、売女ばいじょか何ぞのようように思われて、その体は愚か、美しい態度も表情も卑しむ気になつた。で、その夜は悶もたえ悶もたえて殆ど眠ぼとんられなかつた。様々の感情が黒雲のように胸を通つた。その胸に手を当てて時雄は考えた。いつそこうしてくれようかと思つた。どうせ、男に身を任せて汚れているのだ。このままこうして、男を京都に帰して、その弱点を利用して、自分の自由いりゆうにしようかと思つた。と、種いろいろ々なことが頭脳あたまに浮ぶ。芳子はその二階に泊つて寝ていた時、もし自分がこつそりその二階に登つて行つて、遣瀬やるせなき恋を語つたらどうであろう。危座きざして自分を諫いさめるかも知れぬ。声を立てて人を呼ぶかも知れぬ。それとも又せつない自分の情を汲くんで犠牲になつてくれるかも知

れぬ。さて犠牲になつたとして、翌朝はどうであろう、明かな日光を見ては、さすがに顔を合せるにも忍びぬに相違ない。日長けるまで、朝飯をも食わずに寝ているに相違ない。その時、モウパッサンの「父」という短篇を思い出した。ことに少女が男に身を任せて後烈しく泣いたことの書いてあるのを痛切に感じたが、それを又今思い出した。かと思うと、この暗い想像に抵抗する力が他の一方から出て、盛さかんにそれと争つた。で、煩悶はんもん又煩悶、懊惱おうれうまた懊惱、寢返を幾度となく打つて二時、三時の時計の音をも聞いた。

芳子も煩悶したに相違なかつた。朝起きた時は蒼あおい顔を為していた。朝飯をも一椀わんで止した。なるたけ時雄の顔に逢うのを避けている様子であつた。芳子の煩悶はその秘密を知られたといふよりも、それを隠しておいた非を悟つた煩悶であつたらしい。

午後にちよつと出て来たいと言つたが、社へも行かずに家に居た時雄はそれを許さなかつた。一日はかくて過ぎた。田中から何等の返事もなかつた。

芳子は午飯ひるめしも夕飯も食べたたくないとして食わない。陰鬱いんうつな気が一家みに充ちた。細君は夫の機嫌きげんの悪いのと、芳子の煩悶はんもんしているのに胸を痛めて、どうしたことかと思つた。昨日の話の模様では、万事円満に収まりそうであつたのに……。細君は一椀なりと召上らなくては、お腹すが空いて為方しかたがあるまいと、それを侷すすめに二階へ行つた。時雄はわびしい薄暮はくぼを苦にがい顔をして酒を飲んでいた。やがて細君が下りて来た。どうしていたと時雄は聞くと、薄暗い室らんぷに洋燈ランブも点つけず、書き懸けた手紙を机に置いて打伏うつぶしていたとの話。手紙？ 誰に遣やる手紙？ 時雄は激した。そんな手紙を書いたつて駄目だと宣告しようと思つて、足

音高く二階に上った。

「先生、後生ごしやうですから」

と祈るような声が聞えた。机の上に打伏したままである。「先生、後生ですから、もう、少し待つて下さい。手紙に書いて、さし上げますから」

時雄は二階を下りた。暫くして下女は細君に命ぜられて、二階に洋燈ランペを点けに行つたが、下りて来る時、一通の手紙を持つて来て、時雄に渡した。

時雄は渴したる心を以て讀んだ。

先生、

私は墮落女学生です。私は先生の御厚意を利用して、先生を欺きました。その罪はいくらお詫わびしても許されませぬほど大きいと思います。先生、どうか弱いものと思つてお

憐あわれみ下さい。先生に教えて頂いた新しい明治の女子としての務め、それを私は行っておりませんでした。矢張私は旧派の女、新しい思想を行う勇氣を持つておりませんでした。私は田中に相談しまして、どんなことがあってもこの事ばかりは人に打明けまい。過ぎたことは為方が無いが、これからは清浄な恋を続けようと約束したのです。けれど、先生、先生の御煩悶が皆な私の至らない為であると思ひますと、じつとしてはいられません。今日は終日そのことで胸を痛めました。どうか先生、この憐れなる女をお憐み下さいまし。先生にお縋すがり申すより他、私には道が無いので御座います。

先生 おもと

時雄は今更に地の底にこの身を沈めらるるかと思つた。手紙を持つて立上つた。その激した心には、芳子がこの懺悔ざんげを敢てあえした理由——総すべてを打明けて縋ろうとした態度を解釈する余裕が無かつた。二階の階梯はしごをけたたましく踏鳴らして上つて、芳子の打伏している机の傍に厳然として坐つた。

「こうなつては、もう為方がない。私はもうどうすることも出来ぬ。この手紙はあなたに返す、この事に就いては、誓つて何人にも沈黙を守る。とにかく、あなたが師として私を信頼した態度は新しい日本の女として恥しくない。けれどこうなつては、あなたが国に帰るのが至当だ。今夜——これから直ぐ父様の処に行きましよう、そして一伍いちごぶしじゆう一什を話して、早速、国に帰るようにした方が好い」

で、飯を食おいたるとすぐ、支度をして家を出た。芳子の胸にさまざまの不服、不平、悲哀が溢あふれたであらうが、しかも時雄の厳おこかなる命令に背そむくわけには行かなかつた。市ヶ谷から電車に乗った。二人相並んで座を取ったが、しかも一語をも言葉を交えなかつた。山下門で下りて、京橋の旅館に行くと、父親は都合よく在宅していた。一伍一什——父親は特に怒りもしなかつた。唯同行して帰国するのをなるべく避けたいらしかつたが、しかもそれより他に路みちは無かつた。芳子は泣きも笑いもせず、唯、運命の奇くしきに呆あきるるといふ風であつた。時雄は捨てた積りで芳子を自分に任せることは出来ぬかと言つたが、父親は当人が親を捨ててもというならばいざ知らず、普通の状態に於いては無論許そうとは為なかつた。芳子もまた親を捨ててまでも、帰国を拒むほどの決心が附いておらなかつた。で、時雄は芳子

を父親に預けて帰宅した。

十

田中は翌朝時雄を訪うた。かれは大勢たいせいの既に定まったのを知らずに、己の事情の帰国に適せぬことを縷々るるとして説こうとした。靈肉共に許した恋人の例ならいとして、いかようにしても離れまいとするのである。

時雄の顔には得意の色が上のぼった。

「いや、もうその問題は決着したです。芳子が一伍一什をすっかり話した。君等は僕を欺いていたということが解った。大変な神聖な恋でしたナ」

田中の顔は俄にわかに変った。羞恥しゅううちの念と激昂げつこうの情と絶望もたえの悶と

がその胸を衝いた。かれは言うところを知らなかつた。

「もう、止むを得んです」と時雄は言葉を續いで、「僕はこの恋に関係することが出来ません。いや、もう厭いやです。芳子を父親の監督に移したです」

男は黙つて坐つていた。蒼あおいその顔には肉の戦慄せんりつが歴々ありありと見えた。不ふ凶と、急に、辞儀をして、こうしてはいられぬという態度で、此処ここを出て行つた。

午前十時頃、父親は芳子を伴うて来た。愈いよいよ今夜六時の神戸急行で帰国するので、大体の荷物は後から送つて貰もらうとして、手廻まわりの物だけ纏まとめて行こうというのであつた。芳子は自分の二階に上つて、そのまま荷物の整理に取懸つた。

時雄の胸は激してはおつたが、以前よりは軽快であつた。二

百余里の山川を隔てて、もうその美しい表情をも見ることが出来なくなると思うと、言うに言われぬ侘<sup>わび</sup>しさを感じずるが、その恋せる女を競争者の手から父親の手に移したことは尠<sup>すくな</sup>くとも愉快であった。で、時雄は父親と寧<sup>むし</sup>ろ快活に種々なる物語に耽<sup>ふけ</sup>つた。父親は田舎の紳士によく見るような書画道楽、雪舟、応挙、容斎の絵画、山陽、竹田<sup>ちくでん</sup>、海屋<sup>かいおく</sup>、茶山<sup>さざん</sup>の書を愛し、その名幅を無数に蔵していた。話は自らそれに移った。平凡なる書画物語は、この一室に一時栄えた。

田中が来て、時雄に逢いたいと言った。八畳と六畳との中じきりを閉めて、八畳で逢った。父親は六畳に居た。芳子は二階の一室に居た。

「御帰国になるんでしょうか」

「え、どうせ、帰るんでしょう」

「芳さんも一緒に」

「それはそれでしよう」

「何時いつですか、お話下されますまいか」

「どうも今の場合、お話することは出来ませんナ」

「それでは一寸ちよつとでも……芳さんに逢わせて頂く訳には参りませんまいか」

「それは駄目でしょう」

「では、お父様は何方へお泊りですか、一寸番地をうかがいたいですが」

「それも僕には教えて好いか悪いか解らんですから」

取附く島がない。田中は黙しぼって暫しばし坐まっていたが、そのまま辞儀をして去った。

昼飯ぜんの膳ぜんがやがて八畳に並んだ。これがお別れだと云うので、

細君は殊ことに注意して酒肴さけさかなを揃そろえた。時雄も別れのしるしに、三人相並んで会食しようとしたのである。けれど芳子はどうしても食べたくないという。細君が説とき勸すすめても来ない。時雄は自身二階に上った。

東の窓を一枚明けたばかり、暗い一室には本やら、雑誌やら、着物やら、帯やら、鑷びんやら、行李こうりやら、支那鞆しなかばんやらが足の踏ふみ度ども無い程に散らばっていて、塵埃ほこりの香が夥おびただしく鼻を衝つく中に、芳子は眼を泣腫なきはらして荷物の整理を為していた。三年前、青春の希望湧わくがごとき心を抱いだいて東京に出て来た時のさまに比べて、何等の悲惨、何等の暗黒であろう。すぐれた作品一つ得ず、こうして田舎に帰る運命かと思うと、堪らなく悲しくならずにはいられまい。

「折角支度したから、食つたらどうです。もう暫くは一緒に飯

も食べられんから」

「先生——」

と、芳子は泣出した。

時雄も胸を衝いた。師としての温情と責任とを尽したかと烈しく反省した。かれも泣きたいほど侘わびしくなつた。光線の暗い一室、行李や書籍の散逸せる中に、恋せる女の帰国の涙、これを慰むる言葉も無かつた。

午後三時、車が三台来た。玄関に出した行李、支那鞆、信玄袋を車夫は運んで車に乗せた。芳子は栗梅くりうめの被布ひふを着て、白いリボンを髪に挿さして、眼を泣腫なきはらしていた。送つて出た細君の手を堅く握つて、

「奥さん、左様なら……私、またきつと来てよ、きつと来てよ、来ないでおきはしないわ」

「本当にね、又出ていらつしやいよ。一年位したら、きつとね」と、細君も堅く手を握りかえした。その眼には涙が溢れた。女心の弱く、同情の念はその小さい胸に漲り渡つたのである。

冬の日のやや薄寒き牛込の屋敷町、最先に父親、次に芳子、次に時雄という順序で車は走り出した。細君と下婢とは名残を惜んでその車の後影を見送っていた。その後隣に隣の細君がこの俄かの出立を何事かと思つて見ていた。猶その後の小路の曲り角に、茶色の帽子を被つた男が立つていた。芳子は二度、三度まで振返つた。

車が麴町の通を日比谷へ向う時、時雄の胸に、今の女学生とということが浮んだ。前に行く車上の芳子、高い二百三高地巻、白いリボン、やや猫背勝なる姿、こういう形をして、こういう事情の下に、荷物と共に父に伴れられて帰国する女学生はさぞ

多いことであろう。芳子、あの意志の強い芳子でさえこうした運命を得た。教育家の喧やかましく女子問題を言うのも無理はない。時雄は父親の苦痛と芳子の涙とその身の荒涼たる生活とを思つた。路行く人の中にはこの荷物を満載して、父親と中年の男子に保護されて行く花の如き女学生を意味ありげに見送るものもあつた。

京橋の旅館に着いて、荷物を纏まとめ、会計を済ました。この家は三年前、芳子が始めて父に伴れられて出京した時泊つた旅館で、時雄は此処に二人を訪問したことがあつた。三人はその時と今とを胸に比較して感慨多端であつたが、しかも互に避けて面おもてにあらわさなかつた。五時には新橋の停車場に行つて、二等待合室に入つた。

混雑また混雑、群衆また群衆、行く人送る人の心は皆空そらになつ

て、天井に響く物音が更に旅客の胸に反響した。悲哀かなしみと喜悅よろこびと好奇心とが停車場の到る処に巴渦うずを巻いていた。一刻毎に集り来る人の群、殊に六時の神戸急行は乗客が多く、二等室も時の間に肩摩けんま鞞こくげき撃の光景となつた。時雄は二階の壺屋つぼやからサンドウィッチを二箱買って芳子に渡した。切符と入場切符も買った。手荷物もののチツキも貰つた。今は時刻を待つばかりである。

この群集の中に、もしや田中の姿が見えはせぬかと三人皆思つた。けれどその姿は見えなかつた。

ベルが鳴つた。群集はぞろぞろと改札口に集つた。一刻も早く乗込もうとする心が燃えて、焦立いらだつて、その混雑は一通りでなかつた。三人はその間を辛かろうじて抜けて、広いプラットホームに出た。そして最も近い二等室に入った。

後からも続々と旅客が入つて来た。長い旅を寝て行こうとす

る商人もあつた。呉<sup>くれ</sup>あたり<sup>ちようちよう</sup>りに帰るらしい軍人の佐官もあつた。大阪言葉を露骨に、喋<sup>ちやうちやう</sup>々と雑話に耽<sup>ふ</sup>ける女連もあつた。父親は白い毛布を長く敷いて、傍に小さい鞆を置いて、芳子と相並んで腰を掛けた。電氣の光が車内に差渡つて、芳子の白い顔がまるで浮彫のように見えた。父親は窓際に来て、幾度も厚意のほどを謝し、後に残ることに就いて、万事を囑<sup>しよく</sup>した。時雄は茶色の中折帽、七子<sup>ななこ</sup>の三紋<sup>みつもん</sup>の羽織<sup>いでたち</sup>という扮装で、窓際に立尽していた。

発車の時間は刻々に迫つた。時雄は二人のこの旅を思い、芳子の将来のことを思つた。その身と芳子とは尽きざる縁<sup>えにし</sup>があるように思われる。妻が無ければ、無論自分は芳子を貰つたに相違ない。芳子もまた喜んで自分の妻になつたであらう。理想の生活、文学的の生活、堪え難き創作の煩悶<sup>はんもん</sup>をも慰めてくれるだ

ろう。今の荒涼たる胸をも救つてくれる事が出来るだろう。「何故、もう少し早く生れなかつたでしょう、私も奥様時分に生れていれば面白かつたでしょう……」と妻に言つた芳子の言葉を思い出した。この芳子を妻にするような運命は永久その身に来ぬであろうか。この父親を自分の舅しゅうとと呼ぶような時は来ぬだろうか。人生は長い、運命は奇くしき力を持つている。処女でないということが——一度節操を破つたということが、却かえつて年多く子供ある自分の妻たることを容易ならしむる条件となるかも知れぬ。運命、人生——曾かつて芳子に教えたツルゲネーフの「ニンとバブリン」が時雄の胸のほに上つた。露西亞ロシアの卓すぐれた作家の描いた人生の意味が今更のように胸を撲うつた。

時雄の後に、一群の見送人が居た。その蔭に、柱の傍に、いつ来たか、一箇の古い中折帽を冠つた男が立っていた。芳子は

これを認めて胸を轟とどろかした。父親は不快な感を抱いた。けれど、空想に耽ふけつて立尽した時雄は、その後、その後にその男が居るのを夢にも知らなかった。

車掌は発車の笛を吹いた。

汽車は動き出した。

十一

さびしい生活、荒涼たる生活は再び時雄の家に音信おとずれた。子供を持ってあまして喧やかましく叱しかる細君の声が耳について、不愉快な感を時雄に与えた。

生活は三年前の旧むかしの轍わだちにかえつたのである。

五日目に、芳子から手紙が来た。いつもの人懐なつかしい言文一

致でなく、礼儀正しい候文で、

「昨夜恙なく帰宅致し候儘御安心被下度、此の度はまことに御

忙しき折柄種々御心配ばかり相懸け候うて申訳も無之、幾重に

も御詫申上候、御前に御高恩をも謝し奉り、御詫も致し度候い

しが、兎角は胸迫りて最後の会合すら辞み候心、お察し被下度

候、新橋にての別離、硝子戸の前に立ち候毎に、茶色の帽子う

つり候ようの心地致し、今猶まざまざと御姿見るのに候、山北

辺より雪降り候うて、湛井よりの山道十五里、悲しきことのみ

思い出で、かの一茶が『これがまアつひの住家か雪五尺』の名

句痛切に身にしみ申候、父よりいずれ御礼の文奉り度存居候え

ども今日は町の市日にて手引き難く、乍失礼私より宜敷御礼申

上候、まだまだ御目汚し度きこと沢山に有之候えども激しく胸

騒ぎ致し候まま今日はこれにて筆擱き申候」と書いてあつた。

時雄は雪の深い十五里の山道と雪に埋れた山中の田舎町とを  
思い遣やつた。別れた後そのままにして置いた二階に上つた。懐  
かしさ、恋しさの余り、微かすかに残つたその人の面影おもかげを偲しのぼうと  
思つたのである。武蔵野むさしのの寒い風の盛さかんに吹く日で、裏の古樹に  
は潮の鳴るような音が凄すさまじく聞えた。別れた日のように東の窓  
の雨戸を一枚明けると、光線は流るるように射し込んだ。机、  
本箱、罌びん、紅皿べににら、依然として元のまままで、恋しい人はいつもの様  
に学校に行つていゝるのではないかと思われる。時雄は机の抽斗ひきだし  
を明けてみた。古い油の染みたりボンがその中に捨ててあつた。  
時雄はそれを取つて匂においを嗅かいだ。暫しばらくして立上つて襖を明け  
てみた。大きな柳行李が三箇細引で送るばかりに絡からげてあつて、  
その向うに、芳子が常に用いていた蒲団ふとん——萌黄唐草の敷蒲団もえぎからくさ  
と、線の厚く入つた同じ模様の夜着とが重ねられてあつた。時

雄はそれを引出した。女のなつかしい油の匂いと汗のにおいと言ひも知らず時雄の胸をときめかした。夜着の襟えりの天鷲絨びろうどのきわだ際立だつて汚れているのに顔を押し付けて、心のゆくばかりなつかしい女の匂いを嗅かいだ。

性慾と悲哀と絶望とが忽たちまち時雄の胸を襲つた。時雄はその蒲団を敷き、夜着をかけ、冷めたい汚れた天鷲絨の襟に顔を埋めて泣いた。

薄暗い一室、戸外には風が吹ふ暴ぎあれていた。

蒲团

底本：「蒲団・重右衛門の最後」新潮文庫、新潮社  
1952（昭和 27）年 3 月 15 日発行  
1997（平成 9）年 5 月 25 日 72 刷

入力：細渕真弓

校正：細渕紀子

2003 年 1 月 8 日作成

2008 年 5 月 4 日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫  
(<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作  
にあたったのは、ボランティアの皆さんです。